

Journal of Civic Engagement Research

シビックエンゲージメント研究

第3号



刊行によせて

センター長挨拶 シビックエンゲージメント研究・教育・活動のサイクルの形成と稼働 …	5
副センター長挨拶 『シビックエンゲージメント研究』第3号の刊行に寄せて ……………	6
シビックエンゲージメントセンターについて ……………	7
コーディネーター挨拶 ……………	8
学生スタッフ ……………	9

I 研究論文・実践報告

実践報告

相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト「わかば」実践報告Ⅱ ー活動内容の深化に向けてー（水谷耕平・「わかば」2024年度学生メンバー） ……………	13
--	----

II シビックエンゲージメントセンター活動報告

2024（令和6）年能登半島地震への対応 ……………	33
《ボランティアプログラム》	
渋谷おとなりサンデー参加・記録学生スタッフ ……………	34
笹塚小学校 夏の学習支援ボランティア ……………	34
夏の草むしり隊ボランティア ……………	35
笹塚プロジェクト ……………	36
青山祭に行こう！ ……………	37
笹塚小学校学習支援・居場所づくり「水曜塾（仮）」 ……………	37
相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト（わかば） ……………	38
相模原市立図書館ボランティア ……………	39
相武台団地活性化プロジェクト ……………	41
青山学院大学×セントクワイナリー×相模原市中央区役所コラボ企画 ……………	42
藤野プロジェクト ……………	43
相模原市立小学校連合運動会ボランティア（相模原地域小中学校等連携事業） ……………	44
青学国際子ども食堂 ……………	45
《イベント》	
ボランティアオリエンテーション ……………	46
ボランティアカフェ（ボラカフェ） ……………	47
①「貧困って何だろう？ーフィリピンに行って考えたことー」 ……………	47
②「能登半島地震での災害ボランティア活動報告」 ……………	48
③「生成 AI って何？～ ChatGPT の世界を知る～」 ……………	48
④「入管面会の現場からー希望を繋ぐにはどうすればいいのか？ー」 ……………	49
CEC 学生スタッフ企画「衣服から日常をより良く」 ……………	50
2024 年度青山学院大学シビックエンゲージメントセンター活動報告会 ……………	51

《講座・セミナー》

シビックエンゲージメントははじめの一步	52
青山シビックエンゲージメントフォーラム	52
2024 年度国際協力プランナー入門	53
日本理化学工業工場見学ツアー	54
CEC セミナー（勉強会）「総合的な学習 探求『シブヤ未来科』の実践から学ぶ 学校と企業の連携・チームティーチング」	55
子どもの居場所パネル展示&相談会	55
認知症サポーター養成講座	56
防災ボランティア講習：無線機を使ったコミュニケーションを体験しよう	57

《各種サポート制度》

災害・復興支援活動に対するサポート制度	58
教職員ボランティア活動補助プログラム	58
ボランティア・社会貢献プロジェクト・サポート制度（通称ボラサポ）	58

【スタートアップコース】

古民家カフェ「六つ季の家」認知度向上プロジェクト	59
「未来の教育を語ろう！」プロジェクト	60

【ステップアップコース】

あらとう青山祭 2024	60
Painting AKABEKO in Taipei by MF3.11 Lab	61
AOGAKU ボランティアネットワーク	62

《正課での取り組み（青山スタンダード科目）》

サービス・ラーニング科目	63
ボランティア・市民協働論	64

《アドバイザー・グループ（アドグル）》

珈琲を知り、つながりを広げ、深める	65
-------------------------	----

《学生スタッフの活動》

学生スタッフによる SNS（Instagram）運用	66
学生スタッフによるボランティア広報誌「CEC TIMES」	67
2024 年度ボランティアオリエンテーション	68
学生スタッフによるボランティア活動相談会「春ボラトーク」	68
ユニコムプラザさがみはら「まちづくりフェスタ」の展示	69
第 22 回相模原祭への出展	70

Ⅲ 資料

シビックエンゲージメントセンター利用状況	73
シビックエンゲージメントセンター規則	77
シビックエンゲージメントセンター運営委員、実務委員、学生スタッフ	80

刊行によせて



シビックエンゲージメント研究・教育・活動の サイクルの形成と稼働

シビックエンゲージメントセンター センター長
宮副 謙司

青山学院大学の「シビックエンゲージメントセンター」(CEC)は、本学の学生・教職員が、多様化する市民協働事業を通して、サーバント・リーダーとして成長することを目的に2022年に開設され、従来の「ボランティアセンター」の概念や活動の枠を広げて活動しています。

例えば、学生が与えられたボランティアの活動機会に参加するだけでなく、企業・団体や地域の方々と企画の段階から深く関わり、相互のディスカッションを重ね、望ましいコミュニティ活動を考え、運営を準備し、共感を広く得られるように情報を発信しながら、実践しています。まさに「市民としての主体性」(シチズンシップ)を高める活動となっています。

この紀要も、ボランティア活動報告書の域を超え、CECコーディネーター(助教・助手)がシビックエンゲージメント領域の研究に取り組んだ成果の発表や、学生をコーディネート・指導・支援して取り組んだ地域連携・企業連携の活動実績の報告までをカバーするものになっております。

CECコーディネーターたちの研究は、学生や企業・地域・団体に向けたシビックエンゲージメントの考え方の啓蒙・教育につながり、シビックエンゲージメント活動(CEC事業計画での取り組み)の協働活動の開発となり、学生たちが取り組んだ活動の成果報告は、事例の蓄積となり、次の研究の対象となる、というシビックエンゲージメントの研究・教育・活動の実践のサイクルを形成しています。

2024年度のCEC活動成果としては、第一に、CECの活動を7領域-「子ども支援」「被災地・防災」「環境保全」「地域活性化・まちづくり」「高齢者支援」「障がい者支援」「国際協力・難民支援」(順不同)に重点化しました。そのうえで、CEC学生スタッフの活動企画・実践の促進のほか、学生ボランティア団体(青山10:相模原5)の活動支援、スタートアップならびにステップアップの支援を積極的に行いました。

第二には、青山キャンパスでの企業連携の大幅な増加があげられます。ソフトバンク、パタゴニア、アニエスB、パソナ、アクタス、サッポロビール、プラスファニチャー、ゴールドウインなどとの連携が始まり、この関係先との学生の協働(CBL:コミュニティ・ベースド・ラーニング)が増加しました。また地域連携でも渋谷区笹塚の商店街にある「笹塚十号のいえ」のコミュニティ活動に学生が参画し社会課題を学ぶとともに、地域の方々のためのコミュニティ活動を新たに企画し実行しました(「青野菜カフェ」「小学生の放課後学習の支援」など)。

このように、他の大学には見られない青学独自の特徴を生かしたこうしたシビックエンゲージメント研究・教育・活動のサイクルになった取り組み実績を、この白書を通じてご理解いただければ幸いです。そして、そのサイクルがさらに、ぐるぐると活発に回るように、皆様のご支援・ご鞭撻をどうぞよろしくお願いいたします。



『シビックエンゲージメント研究』 第3号刊行に寄せて

シビックエンゲージメントセンター 副センター長
黒岩 裕

2024年4月にシビックエンゲージメントセンターに着任して以来「シビックエンゲージメント」とは何なのかということを考えています。試しに「シビックエンゲージメント」をAIに訳してもらおうと「市民協働」とか「市民参加」という言葉がでてきます。ただ「市民協働」や「市民参加」という日本語に置き換えただけでは「シビックエンゲージメント」の本当の意味を理解したとは言えません。シビックエンゲージメントセンターが取り組んでいる具体的な活動から帰納的に考えることで本当の理解につながるのではないかと思います。

今回の紀要にもシビックエンゲージメントセンターが取り組んでいる具体的な活動がいくつも紹介されています。ボランティア活動だけでも「笹塚小学校夏の学習支援ボランティア」「夏の草むしり隊ボランティア」「相武台団地活性化プロジェクト」「藤野プロジェクト」「相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト（わかば）」「青学国際子ども食堂」等々枚挙にいとまがありません。相模原市中央区のわかばプロジェクトに関しては実践報告も掲載されています。それ以外にもシビックエンゲージメントセンターが実施した講座や講演会、さらに「ボランティアカフェ」のイベントが紹介されています。講座としては「認知症サポーター養成講座」「国際協力プランナー入門」「防災ボランティア講習」などが実施されました。さらに2024年度後期からは「シビックエンゲージメントフォーラム」を定期的を開催し、地域共生社会の創造、環境活動などに取り組む実践家の方々に講演をお願いしました。ボランティア活動等を行なう学生を支援する「スタートアップ」や「ステップアップ」という制度についても報告されています。

これらの活動から推察すると「シビックエンゲージメント」とは、学生と教職員から構成される大学キャンパスという狭い世界の外に出て、外の社会で活動する市民や市民団体、企業や地方自治体、NPO・NGO等と一緒に良い社会を作っていきたいという活動ではないかと思われます。皆さんはどう考えますでしょうか。今回の紀要が皆さんの「シビックエンゲージメント」に関する理解を深める一助になれば幸いです。

青山学院大学シビックエンゲージメントセンターについて

青山学院大学シビックエンゲージメントセンターは2022年4月に開設しました。

青山学院のスクール・モットーである「地の塩、世の光」を体現する人物、サーバント・リーダーの育成に向け策定された AOYAMA VISION に基づき、前進であるボランティアセンターを改組した組織です。

2011年の東日本大震災以降、青学生が主体的に展開してきたボランティア活動を発展させつつ正課との接続を強化させ、サーバント・リーダーシップ教育に取り組みます。

■設 立 2022年4月設立（2016年に設立したボランティアセンターより改組）

■所在地 青山学院大学青山キャンパス 10号館 1階
青山学院大学相模原キャンパス F棟 2階

■センターの特色

- ・「地の塩、世の光」となり地域社会や国際社会に貢献する
- ・「知（学問）の力」「若い（学生）力」「スマート（サーバントリーダー）な力」を活用する
- ・社会のニーズにあったボランティア活動を組織的に展開する

■センターミッション

- ①大学と社会の繋がりをつくる
学生・教職員の自発的な社会貢献活動への参画を促進すること
- ②より良い社会をつくっていく
大学の持つ専門性や強みを活用してボランティアや市民協働活動の社会的効果を向上すること
- ③社会から学び、自分の力へ
社会貢献活動への参加に伴う教育的効果を向上させること



【センター外観 青山（左）、相模原（右）】

コーディネーター挨拶

青山キャンパス

主にサービス・ラーニング科目を担当し、地域社会や NPO 団体の皆さまとの連携のもと、実践的な学びと活動を実施してまいりました。多くのご協力をいただき、心より感謝申し上げます。地域の現場での経験を通じて、学生たちは主体性や共感力を育み、大きく成長しています。今後も、教育と地域貢献の両立をめざし、地域の皆さまとともに学びを深めてまいります。

秋元 みどり

今年度、青山キャンパスのコーディネーターに着任いたしました。さまざまな団体や機関との連携のもと、おもに児童福祉の領域で非営利活動を 10 数年つづけてきた経験を活かして、大学生が地域のなかで学び、またよりよい社会をつくることに貢献できるかたちを作っていきたいと思います。様々な人、団体、企業が多様な取り組みをしている渋谷という地で、今後どのようなコラボレーションを展開していけるか、大変たのしみです。

中里 晋三

2024 年 4 月に着任いたしました。多様な魅力にあふれる渋谷での、地域の皆さまの先進的な取り組みや、そのスピード感に日々刺激を受けています。学生の豊かな感性や独自の発想との掛け算により、青山学院大学のシビックエンゲージメントセンターだからこそできることに取り組んでまいりたいと思います。コーディネーターとして、一市民として学内外の様々な方々との素敵な出会いを楽しみにしております。

広瀬 かおり

相模原キャンパス

シビックエンゲージメントセンターが開設されてから 3 回目の刊行となりました。その名称も少しずつ学内外に広がりつつあると感じています。本センターは、ボランティアセンターを改組する形で設置され、ボランティア活動の支援にとどまらず、学生や教職員が市民として社会とつながり、深く関わる場となることが期待されています。この背景には、大学が果たすべき社会貢献の使命をより積極的に果たしていきたいという思いがあります。その思いや責任を担うべく、今後もさまざまな活動に取り組んでまいります。

三神 憲一

今年度も相模原ワイン企画や相模原市立図書館ボランティア等、新たな企画を立ち上げ運営させていただきました。また、「わかば」プロジェクトの活動や連合運動会ボランティアなど、以前からの継続的な活動を通し、地域や行政の方々と学生たちのつながりもより強化することができたと感じています。今後も相模原をはじめ、地域や社会に愛される青山学院大学を目指して、また CEC の活動を通して学生の学びや成長をサポートできるよう尽力してまいります。

水谷 耕平

学生スタッフ

シビックエンゲージメントセンターでは、センターが掲げるミッション実現に向けて、コーディネーターと共に青学生のボランティア活動や社会貢献活動を促進し、学生と地域をつなぐ役割を担う学生スタッフ制度を設けています。

「学生スタッフとしての活動を通して、ボランティアや社会貢献活動に関する視野を拡げ、さまざまな地域や団体との連携から社会について学び、CECと共に青学生の社会貢献力を高めたい！」そんな強い意志と行動力をもつ学生たちが活動しています。

主な活動

- ・センター主催事業の企画や運営
- ・本学学生に向けたボランティア活動や市民協働活動の啓発や促進・情報発信
- ・その他、センターが必要とする活動の補佐業務

青山キャンパス

22人（1年生3人、2年生9人、3年生7人、4年生2人、修士2年1人）



相模原キャンパス

5人（1年生2人、2年生2人、3年生1人）



学生スタッフの活動を振り返って

私はシビックエンゲージメントセンターの学生スタッフとして活動し、主に笹塚プロジェクトに携わってきました。笹塚の地域住民の方々との交流を通じて、地域に根差した活動の楽しさや意義を感じながら取り組んできました。初めは初対面の方々との接し方に戸惑うこともありましたが、チームで話し合うなかで、より良いイベントを企画・実施する力が身に付き、自信をもって交流できるようになりました。ボランティアには、「誰かのために自分を犠牲にする」というイメージがあるかもしれませんが、この活動は私たち自身もやりがいを感じながら取り組むことができ、それが大きな魅力だと考えています。私たちが企画したイベントに学生スタッフではない青学生が参加し、関心を持ってくれている様子を見たときに、我々の活動が学内にもポジティブな影響を与えていることを実感しました。今後もより多くの方々を巻き込みながら、積極的に活動を続けていきたいです。



青山キャンパス学生スタッフ
経済学部 4 年
鈴木 遥香



相模原キャンパス学生スタッフ
コミュニティ人間科学部 2 年
鶴島 伊吹

1 年間を振り返り、学生スタッフの活動を通しての学びや成長が多くあった。その中でも私の中で印象的だったのは幅広い視野や考え方を獲得していったことである。今までボランティア活動を行う立場から、誰かに活動を提供したり、広報として広めたりなど違った視点からボランティア活動を見つめなおすことができた。実施する人や参加する人、支援を受ける人など、様々な状況の人々の考えや立場を考えることで、ボランティア活動における視野や考えが広がった。また、ボランティア活動における情報提供の在り方についても広報の面から学びを深めることにつながった。単にボランティア活動と言っても、様々な人たちが関わり、人と人とのつながりが生まれコミュニティの場となっていく。この過程における学びや発見が私の成長につながっていくと感じた。これからも周囲への感謝の気持ちを忘れず、ボランティア活動であふれる日々を送ってきたい。

I 研究論文・実践報告

<実践報告>

相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト 「わかば」実践報告Ⅱ —活動内容の深化に向けて—

水谷 耕平¹・「わかば」2024年度学生メンバー^{*2}

¹ 青山学院大学シビックエンゲージメントセンター

² 青山学院大学

Practical Report II on the “Wakaba” Project (Discovery, Creation and Dissemination
Project of Sagami-hara City Chuo Ward’s Attractiveness): Deepening the Activities

MIZUTANI Kohei¹・“Wakaba” Student Members for the 2024 Academic Year²

¹ Civic Engagement Center, Aoyama Gakuin University

² Aoyama Gakuin University

キーワード：地域活性化、正課外教育、シビックエンゲージメント、相模原市中央区

1 はじめに

本稿は青山学院大学（以下「本学」）シビックエンゲージメントセンター（以下「CEC」）主催の「相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト」（愛称：「わかば」）の2年目となる2024年度（以下「今年度」）の活動を基に、その成果と課題を考察するものである。大学生の地域活性化活動についての論考は、ゼミや研究室での活動、もしくは実習科目の実践報告としてのものが多く、正課外教育もしくは課外活動として書かれたものは必ずしも多くない。本稿は正課外教育としての地域活性化活動について論じる点、また本稿の執筆・投稿自体をプロジェクトの活動として組み込んでいる点に特徴がある。なお、本稿は本プロジェクト担当コーディネーターとプロジェクト参加学生の共著である。

本プロジェクトにおいて、コーディネーターとしては、正課外教育としての地域活性化系プロジェクト活動を通して、学生が当該地域を理解し、また人間的に成長する機会が得られるような関わり方を意図した。また本プロジェクトはCECの提供する市民協働プロジェクト（＝ボランティア活動）であるため、特に学生の「自発性・主体性」を重視する立場から、コーディネーターとしては学生を過度にリードもしくは指導することなく、区役所との橋渡し役や地域理解の機会・場の提供、企画立案・実施に向けたアドバイスや資源・環境面での支援に重点を置いて関与した。

また初年度の活動に対しては、プロジェクト全体としての一体感醸成の不足、「調査」的側面の不足（水谷・「わかば」2023年度学生メンバー 2024: 49）、それに伴う魅力の「発掘・深掘り」の不足、チームミーティングのスケジュール調整の難しさおよび対面での意見交換機会の少なさなどが課題として挙げられていた。そのため、年度テーマの設定、学生の役割分担、全体ミーティングの運営方法等を見直すことで初年度の課題への対応を試みた。

* 相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト（愛称：わかば）の2024年度学生メンバーは次の通り：泉隼人、伊東舞波、岩本愛佳、宇治学人、大河原遥夏、大林慈、大原亜里咲、小川愛乃、小田吏桜、金井颯汰、小林賢人、昆真唯子、椎野愛実、若槻真凜（五十音順）

2 プロジェクトの概要および構成と位置付け

本プロジェクトは2023年度（以下「初年度」）にCECの新たな市民協働プロジェクトとして始まり、学生たちが相模原市中央区（以下「中央区」）の魅力を発見し、発信するための企画を立案・実施するものである。中央区の大学連携事業の一つともなっている。中央区は本学相模原キャンパスの所在地で、学生にとって最も身近でありながら十分には理解されていない地域である。本プロジェクトは、そうした地域での活動を通じて、学生が地域やボランティア活動に関心を持つための導入的な役割を担っている。なお、「わかば」という愛称は初年度の学生メンバーによって命名された。

今年度の学生メンバーの構成は表1の通りである。初年度からの継続メンバー9名に、5名の新規メンバーが加わり、計14名で構成されている。プロジェクトはこの14名とCECの担当コーディネーターによって運営されており、活動に際しては相模原市中央区役所（以下「区役所」）（地域振興課・区政策課）の協力を頂きながら進めた。前述の通り、コーディネーターはあくまでも支援的立場に立ち、活動の主体は学生たちとしている。

また、本プロジェクトはコミュニティ・ベースド・ラーニング（CBL）の考えを基盤にしている。すなわち、地域社会との連携・協働を通じて、学生が主体的な学びや成長を得ることが本プロジェクトの根幹を成す考え方である。宮副（2018: 345, 347）はCBLにおける五つの段階を示している（表2）が、本プロジェクトはこのうちレベル4の段階までをカバーしている活動であるといえる。つまり、学生たちは単に地域活性化の活動に参加するだけでなく、区と連携しながら自ら企画を立案・実施することで活動を主体的に構築している。

また、杉岡（2007: 85）は大学と地域の連携（地学連携）について大学内でそれを主導する立場の違いによって(i)大学法人主導型、(ii)大学教員主導型、(iii)学生主導型、(iv)ガバナンス型の4類型に分類しているが、これに照らすと本プロジェクトは、大学内および自治体内の専門部署が連携して行うという意味で(iv)ガバナンス型に該当する。ただし、杉岡（2007: 85）の定義では組織全体を挙げてのネットワークや他団体によるネットワークを想定しており「わかば」は必ずしもそうした大規模なネットワークによる取り組みを想定していないため、(iv)ガバナンス型の亜種としての位置付けといえよう。

表1：初年度および今年度の学生メンバー構成比較

2023 年度	学年	1年	2年	3年	4年	計
	学部					
	コミュニティ人間科学部	4名	4名	3名	2名	13名
	地球社会共生学部		2名			2名
	計	4名	6名	3名	2名	15名

※途中で1名辞退（コミュニティ人間科学部4年）となったため、最終的には全体で14名となっている。

2024 年度	学年	1年	2年	3年	4年	計
	学部					
	コミュニティ人間科学部	1名	4名	4名	2名	11名
	地球社会共生学部	1名		2名		3名
	計	2名	4名	6名	2名	14名

※うち、2023年度からの継続9名、新規5名。

（筆者作成）

表2：CBLの5段階論とわかばの活動

CBLレベル	CBLレベルの説明	わかばの活動
レベル1	コミュニティを知る	中央区勉強会、中央区を知るためのツアー
レベル2	コミュニティの活動に参画し体験する	わかばへの学生の参画
レベル3	コミュニティの活動に参画し、さらに活動促進のための提案まで行う	各チームによる企画立案や区への提言
レベル4	コミュニティ活動を新たに創造し実践する	各チーム企画の実施（活動の創造）
レベル5	CBLを起こす創造的リーダーの養成を行うような教育が大学（特にMBA課程）において存在すること	

（宮副（2018: 345, 347）を基に筆者作成）

3 2年目の目標

本プロジェクトでは立ち上げ時に、表3に示す3点を長期目標として掲げ、これを踏まえて各年度の短期目標を設定している。

初年度は「プロジェクトの骨格を作る」ことを短期目標とし、学生・CEC・区役所が連携して一連の活動を実践し、その中から課題や改善点を見出し2年目以降につなげることを目指し、一定の成果を上げることができた。今年度は「中央区の魅力の深掘り」を短期目標とし、各チームや学生が中央区のまだ見えていない魅力の発掘や既知の魅力のさらなる掘り下げを目指した。こうした長期・短期目標を基に、次節以降で述べる通り、全体および各チームでの活動を実施した。

表3：「わかば」の長期的な目標と短期的な目標

長期的な目標	
・相模原市中央区の地域性や魅力を知ること、この地域でボランティアや地域活動をする学生が増えること。 ・青学生の相模原エリアでの活動が増えることで、地域の方々にとって誇れる大学となること。 ・青学生が関わることで相模原市中央区がより魅力ある地域になること。	
短期的な目標	
1年目（2023年度）	プロジェクトの骨格を作る
2年目（2024年度）	中央区の魅力の深掘り

（筆者作成）

4 チーム編成と役割分担

集団での活動では、メンバーが多いほど、個人の貢献度や発揮する力が低下する「社会的手抜き」（リengelマン効果）が発生しやすい。奥本・岩瀬（2012：214）は、これを防ぐチーム設計の要素として、少人数編成や活動の明確化、初期段階での役割分担の重要性を指摘している。そこで本プロジェクトでは、学生14名を4～5人のチームに分け、また一人ひとりに役割を与えることで、貢献意欲の低下を防ぐ仕組みとした。また自由な発想を尊重しつつも、ある程度テーマを示した方が取り組みやすいため、表4に示すように三つのテーマでチームを編成した。メディアチームは本プロジェクト立ち上げに先立ち、区政策課から中央区公式Instagramの内容検討への学生参画の要望があり、それを基に設定したものである。ツアーチームは、その企画検討過程を通して中央区の魅力を探ることができ、またやるべきことも明確であり、取り組みやすいテーマとして設定している。自由企画チームは、本プロジェクトの本来の目的である魅力発信方法の検討を含め、学生が自由に企画を立案・実施することを目的として設定している。

なお3チームのうち、初年度の「Instagramチーム」は「メディアチーム」と改称した。中央区の持つ広報媒体は公式Instagramに限らず、相模原市が発行する広報紙の中央区版ページやコミュニティ放送のラジオ番組などもあるため、より幅広い媒体を活用できるよう、範囲を広げた形である。また、プ

表4：プロジェクト内のチーム・担当配置及び人数

担当 \ チーム	メディア チーム	ツアー チーム	自由企画 チーム	
取りまとめ担当	A（4年）	E（4年）	J（3年）	
スケジュール管理担当	B（1年）	F（3年）	K（3年）	
記録担当	C（1年）	G（3年）	L（2年）	
広報担当	C・D（兼務）	H（2年）	M（3年）	
連携担当	D（2年）	I（3年）	N（2年）	
計	4名	5名	5名	14名

アルファベットは学生、（ ）内は学年、**太字**は初年度からの継続メンバーをそれぞれ示す。

（筆者作成）

プロジェクト全体の一体感を高める目的で「連携担当」という役割を新設し、各チームに配置した。

以上の変更点を基に、第2回全体ミーティングでチームおよび担当を決め、表4のようなメンバーの割り振りとなった。メンバーの希望を基にチーム分けをした上で、各チーム内で合議により役割を決めたが、いずれのチームにも継続メンバーや高学年の学生が含まれ、比較的バランスの取れた構成となった。

5 プロジェクト全体としての活動

本節では今年度の活動について全体的な流れを概説する⁽¹⁾。なお、各チームの具体的な活動は第6～8節で述べる。

4月下旬にオンラインでの説明会を実施し、メンバーを募集した上で、5月から活動を開始した。概ね毎月1回の頻度で全体ミーティング⁽²⁾を実施し、プロジェクト全体としての一体感醸成を図るため、座席配置を口の字型にし、区職員も学生の間分散して座る形とし(図1)、前半期には取りまとめ担当を中心にメンバーが自ら考えた方法でアイスブレイクを行った。また、初年度はチームミーティングにおける学生間のスケジュール調整に課題があったため、全体ミーティングの開始時刻を早め、終了後にそのまま各チームがミーティングを行えるようにした。結果的に、ここにも区職員に参加いただくこととなり、学生だけのチームミーティングよりも具体性のある議論が実現した。

6月にはメンバーが中央区を知るためのツアーとして、相模原市立博物館、宇宙航空研究開発機構(JAXA)相模原キャンパス、にこにこ星ふちのべ商店会、相模原スポーツ・レクリエーションパーク、小山公民館を訪問・見学した(図2)。

図1：全体ミーティングの様子



(左：初年度、右：今年度) (筆者撮影)

図2：相模原市中央区を知るためのツアー



(写真：筆者撮影)

10月には本学相模原キャンパスの大学祭(相模原祭)に、CEC主催の三つの市民協働プロジェクトの合同教室企画として参加し、輪投げとクイズを使ったミニゲームなどを行い、2日間で述べ62名の方にわかばの企画に参加いただいた。また11月には、中央区内の相模原市立共和中学校での福祉体験

講座にも3プロジェクト合同で参加し、中学1年生を対象に各プロジェクトの活動を説明するとともに、生徒たちが行う高齢者疑似体験の補助などを行った。こうした活動を通して、メンバーは地域への理解を深めるとともに、人前で活動内容を簡潔に伝える経験を積むことができた。

本プロジェクトでは、中間報告会、活動報告会、CEC 紀要への投稿（本稿）を学生の活動報告の機会として設定している。報告会では企画の意義や成果を短時間で効果的に伝える力が、紀要投稿では文章としてそれを伝える力が求められる。こうした振り返りや報告のプロセスも、正課外教育において学びを深める重要な要素である。また今年度は継続メンバーが多く、初年度よりも質の高い報告が求められ、それを意識し、達成することで学生たちの成長にもつながった。

6 メディアチームの活動について

(1) 企画の背景と目的

メディアチームは、主に中央区公式 Instagram の中で映像コンテンツ「さがみん Vlog」を企画・実施した。詳細は後述の通りだが、ここではその背景と目的を概説する。

初年度の「Instagram チーム」から今年度は「メディアチーム」に名称が変わったため、より幅広い SNS の運用も検討されたが、TikTok や YouTube など新規のチャンネル開設はハードルが高く、既存のフォロワーがいる SNS の方が波及効果を期待できることから、今年度も Instagram を活用することとした。発信方法は前身の Instagram チームによる「中央区さんぽ」を参考にした。

初年度の Instagram チームは画像投稿中心の「中央区さんぽ」という企画を実施したが、動画投稿が無かったため、今年度は動画コンテンツ制作に注力した。その背景には、あまり知られていない中央区のスポットの認知度を高め、より多くの人に魅力を感じてもらいたいというメンバーの思いがあった。動画形式にすることで視覚・聴覚に訴え、現地の雰囲気をより鮮明に伝えられ、紹介したスポットへの訪問を促進できると考えた。相模原市のマスコットキャラクター「さがみん」を使用した「さがみん Vlog」と題した動画コンテンツを作成し、区内外の人々に親近感を持ってもらい、紹介したスポットを含め中央区への訪問意欲が高まるような魅力発信を目的とした。

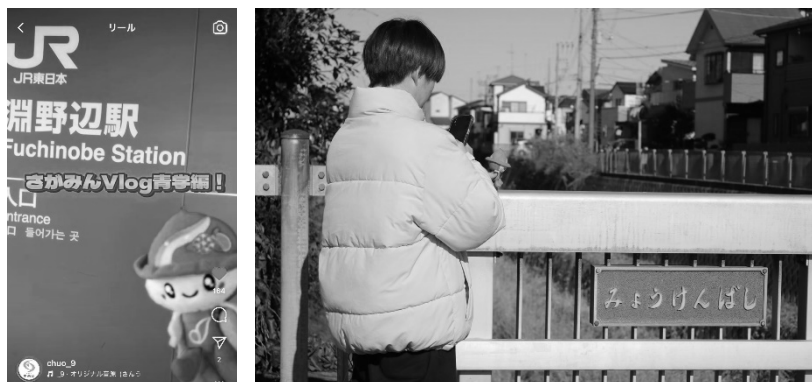
(2) 企画・実施した内容

上記の背景を基に企画した「さがみん Vlog」は、中央区公式 Instagram のリール動画として発信した。地域のスポット紹介に「さがみん」を登場させ、メンバーは撮影、編集、投稿時のコメントの作成を行った（図3）。撮影テーマやスポットの選定では季節性を意識し、例えば11月29日は「紅葉編」、12月20日は「冬のイルミネーション編」と、その時期ならではの風景やイベントに着目した。また、動画を見た後に視聴者が訪れることができるよう、紅葉編では見ごろ前、イルミネーション編ではクリスマス前に撮影・投稿するなど、計画的に投稿準備を行った。

他チームとの協力も積極的に行った。ツアーチームの中央区バスツアーに参加し、ツアー風景を撮影・投稿して活動の様子を伝えるコンテンツを制作したほか、自由企画チームが作成した『ふちのベトレジャーマップ』掲載スポットを巡って現地で撮影し、その様子も投稿している。

加えて、相模原市発行の『広報さがみはら』『ちゅうおう区版』（3月15日号）の撮影・作成に参加した。

図3：「さがみん Vlog」



（左：「さがみん Vlog」サムネイル画像、右：撮影風景（中央区提供））

中央区主催「中央区さくら文学賞」の受賞作品に登場するスポットを区職員と共に巡って取材し（図4）、紙面では本チームメンバーが登場し、各スポットや作品の感想を紹介している。

図4：『広報さがみはら』取材風景



（写真：中央区提供）

(3) 成果と考察

i. 「さがみん Vlog」の成果および考察

「さがみん Vlog」は10月4日から3月7日まで概ね2週間に1回の頻度で計13回投稿した（表5）。本企画では各投稿の「いいね！」数200超、平均再生回数3,000超を目標として設定した。「いいね！」数200という目標値は初年度 Instagram チームの目標を踏襲しており、初年度に達成できなかった目標値を今年度は達成したいという挑戦の意を込めて設定している。再生回数は、中央区公式 Instagram に過去に投稿されたリール動画の中で、再生回数が多かったものを参考に、平均3,000回を目標とした。

今回の Vlog 平均再生回数は3,014回、平均「いいね！」数は116で、「いいね！」数200を超えることができた投稿はなかったが、平均再生回数は目標を達成することができた。特に導入編においては、再生回数が4,764と、3,000回を大きく上回り、全体の平均再生回数目標の達成に貢献しただけで

表5：「さがみん Vlog」の各投稿とアクセスの概要

	テーマ	投稿日	いいね！ 数	コメント数	保存数	閲覧数※1	内訳 (フォロワー/フォロワー外)	リーチ数※2	視聴時間※3	平均再生 時間※4
1	導入編	10月4日	173	1	2	4,764	63.4%/36.6%	1,865	6時間28分55秒	8秒
2	青学編	10月18日	164	0	5	4,343	55.6%/44.4%	1,872	10時間59分35秒	15秒
3	矢部編	11月1日	136	0	4	3,785	59.2%/40.8%	1,684	9時間10分40秒	13秒
4	秋の味覚編	11月15日	96	1	3	2,649	59.7%/40.3%	1,203	6時間3分48秒	13秒
5	紅葉編	11月29日	115	1	2	2,878	54.3%/45.7%	1,303	7時間0分37秒	13秒
6	中央区バスツアー編	12月6日	95	0	3	2,659	56.0%/44.0%	1,227	4時間23分22秒	9秒
7	冬のイルミネーション編	12月20日	100	1	2	2,104	55.2%/44.8%	1,034	4時間25分46秒	11秒
8	年末年始編 in 上溝	12月27日	137	0	7	3,212	59.4%/40.6%	1,528	8時間45分21秒	15秒
9	スポーツ編	1月10日	94	0	2	2,463	59.2%/40.8%	1,256	5時間31分59秒	12秒
10	合格祈願編	1月24日	110	0	1	2,747	56.6%/43.4%	1,320	6時間6分41秒	11秒
11	淵辺義博伝説編	2月7日	83	0	4	2,130	55.2%/44.8%	1,169	4時間53分35秒	11秒
12	ふちのベトレジャーマップ編	2月21日	68	0	4	2,641	59.3%/40.7%	1,273	11時間18分19秒	23秒
13	総集編	3月7日	135	4	5	2,810	76.8%/23.2%	1,398	6時間35分19秒	12秒
総計			1,506	8	44	39,185		18,132		
平均			116	0.6	3.4	3,014		1,395		
投稿開始時のフォロワー数			3,185	人						
2025年2月末時点のフォロワー数			3,348	人						
期間中増加数			163	人						

※1 閲覧数：リール動画が再生または表示された回数

※2 リーチ数：このリール動画を少なくとも1回見た Instagram ユニークアカウントの数

※3 視聴時間：再生された合計時間。リプレイされた時間も含む。

※4 平均再生時間：再生時間を初回閲覧回数で割って算出される。初回閲覧とは、リール動画セッションでのリール動画の初めての再生を指す。

（出典：中央区提供データを基に筆者作成。各投稿に対する反応の各データは2025年4月10日時点のもの。）

なく、中央区公式 Instagram のリール動画の中で最多の再生回数となり、多くの関心を集めることができたといえる。フォロワー／フォロワー外を比較すると、中央区アカウントのフォロワー以外による視聴の比率も高く、中央区に恒常的関心を持たない層にも届いたと考えられる。動画には「まだ行ったことがない公園も訪れてみます」（紅葉編）、「行ってみたいくなりました！」（冬のイルミネーション編）など好意的なコメントも寄せられ、紹介スポットへの訪問促進という当初の目的は一定程度達成できたといえる。

一方で、多くの動画を 90 秒で作成したにも関わらず、平均再生時間は 13 秒程度であり、最後まで動画を見てもらうためには、視聴者の興味を引くさらなる工夫が必要である。具体的には、視覚・聴覚に強い印象を与えるカットを冒頭に置くなど、視聴者の関心を引く要素の導入などが考えられる。

また、昨年度の Instagram チーム「中央区さんぽ」の成果分析では、有名飲食店や季節性のあるスポットの紹介が効果的であったとされている（水谷・「わかば」2023 年度学生メンバー 2024: 45）。今年度は季節性を意識できたものの、有名飲食店などの取材はあまりできなかったため、今後は「グルメ」に着目した動画も作成することで、より多くの関心を集められるのではないだろうか。

「さがみん Vlog」というコンテンツ自体の広報も不足していたため、チラシや名刺サイズのカードなどを活用することで、より波及効果が高まると考えられる。

ii. 『広報さがみはら』『ちゅうおう区版』の成果および考察

この取り組みをから得られた成果は次の 2 点である。

第一に、区職員との協働により、行政の広報における視点や手法を実践的に学べた点である。例えば地域の魅力を単に紹介するのではなく、文学賞受賞作品の舞台を訪れるというストーリー性を持たせる工夫があった。行政がどのように情報を発信し、市内外に魅力を伝えていくかを体験できたことは大きな学びとなった。日常の何気ない場所でも物語の舞台となれば「聖地」になるように、場所に意味を持たせることの重要性を実感した。

第二に、学生が行政の広報事業に関わることで、地域の情報発信に貢献できる可能性があることが分かった。メンバーは広報誌の作成において、単なる感想ではなく、読者が実際に足を運びたいような表現を熟考した。例えば、相模川の紹介では、「気持ちをリセットしたいときにまた訪れたいと思います！」と取材時に訪れたメンバーの思いを率直に書くとともに、「街の中にひっそりとあるこの場所」「下を流れる川は澄んでいて」「白い鳥が水浴びする様子」「川の流れが心地よく聞こえてきて」など、情景が伝わるような臨場感のある表現を意識した。このように学生の視点を取り入れることで、広報に新たなアプローチが生まれ、地域への関心を高める契機にもなると期待される。

今後の課題として、広報紙取材への単なる参加ではない、「参画」が重要であると考え。今回は、紙面のレイアウトや取材場所を区職員に提案していただいたが、学生がゼロベースでページの構成を考えることで、より学生視点からの新たな魅力発信につながるのではないだろうか。

iii. 活動全体を通しての考察

活動に取り組む中で、授業や他の課外活動と並行して企画を進める難しさを感じたメンバーも多かった。特に今年度のメディアチームは新規メンバーかつ下級生が多く、手探りでのコミュニケーションは容易ではなかった。Vlog を 2 週間ごとに投稿すると決め、締め切りに追われる中で、メンバー間でこの活動が「大変なもの」とあるという意識が生まれてしまっているのではないかという懸念もあった。しかし、メンバー間で感情を共有し、「それでも楽しい」という意見を共有できたことで、その後の心理的障壁が取り除かれる転機となった。本プロジェクトのような活動においては、①メンバー間の感情の共有、②義務感ではなく楽しみながら活動すること、が活動をより豊かにする鍵となるのではないだろうか。

7 ツアーチームの活動について

(1) 企画の背景と目的

ツアーチームは今回、中央区を巡るバスツアーを開催した。初年度は本学の学生を対象に徒歩でのツアーを開催したが、その際、魅力あるスポットを数多く巡るには徒歩での移動は限界があること、またより広く対象者を設定する必要があることを感じた。そこで今年度は地域の方を対象としたバスツアーを企画した。また、区役所が翌年度以降に「住民のシビックプライドの向上や地域への愛着を深める市内ツアー」を計画していることを知り、その参考となることも目指した。これにより、区役所からバスの費用および手配の支援を頂くことができた。

ツアーの条件は、①普段あまり足を運ばない場所を巡ることで地域の方に中央区の魅力を再発見してもらうこと、②小学生とその親を対象とし、遊びの要素に加え、史跡や民家資料館での歴史的「学び」の要素を入れることで教育的価値を高めること、そして③学生との交流の場を設けることで満足度を高めることとした。以上の3点を考慮した結果、バスツアーの舞台として「田名地域」を選定した。この地域は、沿線から離れており普段親子で訪れにくい場所であること、数々の史跡や伝統文化、地域行事など深い歴史があること、そして豊かな自然環境（水や森）があり、親子で学ぶ価値が高いことがその理由である。

募集対象は相模原市内在住・在学の小学生と保護者とし、アクアリウムさがみはらをルートに入れたり、告知用のチラシやInstagramのバナーをポップなものにしたりすることで子どもたちに訴求する広報を意識した。さらに、バス内でのレクリエーションや自由時間、昼食等を通じて学生と小学生が交流する機会を設けることも意識した。ツアー実施後には、今後の区主催ツアーへの参考として、参加者アンケートの分析や今後の提案書を区役所に提出することとした。

(2) 企画・実施した内容

上記の背景を基に、11月24日に「わくわく中央区バスツアー」を実施した（図5）。訪問先は8月上旬の事前調査を基に、史跡田名向原遺跡、相模田名民家資料館、アクアリウムさがみはらの3か所を選定した。ポスターやサムネイル（図6）を活用し、区役所のWEBサイト等で周知を行った結果、定員20名に対し15組43名の応募があり、抽選で8組20名に参加いただいた。参加者の内訳は、保護者1名・子ども1名が5組、保護者1名・子ども2名が2組、保護者1名・子ども3名が1組である（計：保護者8名、子ども12名。子ども複数名の組は全てきょうだい）。子どもの学年構成は小学5年生4名、4年生4名、3年生1名、2年生2名、1年生1名であった。ツアー当日は、淵野辺駅と上溝駅で参加者の誘導や集金⁽³⁾を行い、バス内ではツアー概要や注意事項を説明し、「中央区ビンゴ」と題して、中央区やツアーに関連するクイズをビンゴ形式で行った。午前中に史跡田名向原遺跡・旧石器ハテナ館と田名民家資料館を訪問し、解説を聞きながら見学した。昼食は江戸末期から200年続く老舗割烹旅館の旭屋で、相模原産の食材を使用した料理を食べ、午後はアクアリウムさがみはらで自由見学とした。帰りのバス内では、アンケートを実施し、回答者には中央区ノベルティグッズを配布した。

図5：わくわく中央区バスツアーの様子



(写真：筆者撮影)

図 6：わくわく中央区バスツアーの広報媒体



(3) 実施後のアンケートを基にした分析と考察

アンケートは保護者および子ども双方に実施し、それぞれの視点から意見や感想を収集した。アンケートの「『ツアーに行きたい』と言ったのはだれですか?」という質問では、「保護者」という回答が8割弱を占めたことから、参加のきっかけは保護者動機によるものが多く、今後は保護者の関心に訴える内容や広報が有効と考えられる。「ツアーに来る前、たのしみにしていたことは?」という質問では、「アクアリウム」が最多の15票を集め、遊び要素への期待の高さが示された。一方、「ツアーに来て、楽しかったことは?」という質問では、田名向原遺跡と田名民家資料館が事前の期待よりも高い票を得ており、本ツアーを通して地域の新たな魅力を伝えられたことがうかがえる。「今後、どんなツアーに参加したいですか?」という質問では、公共施設裏側ツアーが最多の4割強、次いで市内企業見学ツアーが2割を占め、日常では得られない体験へのニーズが見られた。そのため、今後の案としては公民館や市役所の見学、市内企業の職場体験、中央区内の大学キャンパス見学などが挙げられる。次回のツアーでは、遊び要素を入れつつ、相模原ならではの特性を活かした普段体験できないようなツアーを計画することで、ツアーの魅力向上につながるといえる。また告知も保護者をより意識し、教育的価値や地域資源の魅力を強調することで、参加希望者の増加が期待できる。

(4) メンバーの学びと今後の課題

ツアーの企画段階では、メンバー間の日程調整や意思疎通に苦労する場面も多くあったが、早めの予定決定や余裕を持った作業の開始を心がけたことで、疑問点が生じた際に質問や相談ができる状況を作り、スムーズに準備を進めることができた。また、メンバー同士の積極的なコミュニケーションにより、徐々に連携も深まり、当日の運営に向けたチームワークの強化にもつながった。一方、今回のツアーでは、当日のタイムスケジュールに関して課題も見えてきた。訪問した施設ではスタッフの方々が熱心に解説をしていただいたため、当初の想定よりも施設滞在時間が延び、昼食時間を削るなど、当日の大幅な調整が必要となった。当日の急なスケジュール変更にも対応できるよう、柔軟性と余裕を持ったタイムスケジュールの設定が重要であり、この点は次回以降のツアー設計時の課題としたい。

8 自由企画チームの活動について

(1) 企画の背景と目的

自由企画チームでは中央区淵野辺エリアのスポットを紹介する『ふちのベトレジャーマップ』の作成を行った。本学が所在する淵野辺駅周辺に注目し、その魅力を再発見し発信することを目的としたものである。地域に親しみを持つ学生が主体となり、地域住民と協力して魅力をマップ化し、共有することを目指した。地域の隠れた魅力を発見・共有する過程を通じて、地域住民と学生の相互理解と地域貢献力を深めることも意図した。

本企画の目的は、大きく3点にまとめられる。1点目は、中央区の魅力再発見と発信である。地元の方々から意見を集めてマップ化し発信することで、中央区の魅力を広く伝え、地域を訪れるきっかけとなることを目指した。2点目は、地域との連携である。学生と地域の方々が共同でマップを作成することで、相互理解を深め、小中学校や公共施設との連携強化、プロジェクト全体と地域のつながり創出にもつな

げたいと考えた。3点目は、参加メンバーの主体的な学びである。マップ作成を通じて、地域調査、情報収集、デザイン、交渉力などのスキルを習得し、実践する機会を設けた。

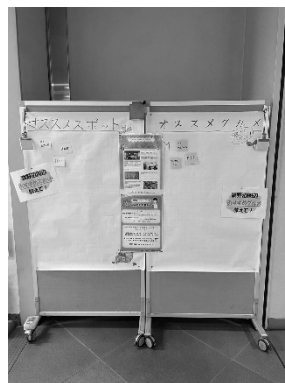
魅力を発信する手段としてマップ作成を選んだ理由は以下の2点である。1点目は、多様な情報を地図上に配置することで、魅力を多角的に発信できる点、また2点目は、成果物として形に残ることで、参加者全員のアイデアと活動の結晶となり、達成感につながると考えたためである。

本企画では、単なる情報収集にとどまらず、実際に現地を訪れて五感を使いながら魅力を発見することを重視し、実践的な活動を通して、地域の魅力を深く理解し、効果的に発信することを目指した。地域住民と学生が協力して淵野辺駅周辺の魅力を再発見し、マップという形で発信する参加型企画とした点に特徴がある。地域の隠れた魅力を発見し共有するという意図で『ふちのベトレジャーマップ』と名付けた。

(2) 企画・実施した内容

自由企画チームの作成した『ふちのベトレジャーマップ』は、地域の方から中央区淵野辺周辺のおすすめスポットやグルメについて意見を募り、学生の視点でマップとしてまとめるというものである。子どもから大人まで気軽に手に取ってもらえるマップを目指した。まず、6月のチームミーティングで企画の検討を行い、学生視点で地域の方の意見も反映しながら魅力的なスポットを伝えたいという思いからマップ企画の概要を決定した。7月には協力を依頼する小中学校、公共施設向けに企画書やポスターを作成した。その際、企画の概要や目的が分かりやすく伝わるように意識した。8月には各所に台紙、ポスターの設置を依頼し、9月にはそれらの設置・回収および集めた意見の集計作業を行った(図7)。その他 Google フォームを用いてわかばメンバーからも意見を収集し、相模原祭のブースでも意見を募るなど、多方面からの意見収集に努めた。10月には全ての収集意見を集計し、票数とチームメンバーの意見をもとにマップの掲載場所を決定した。11月から12月にかけて、掲載店へ取材を行い、並行してマップのレイアウト調整、配布場所の検討を行い、完成したマップを2月上旬に1,000部印刷した(図8)。マップは中央区内の小中学校、公共施設、本学相模原キャンパス、マップの掲載店などに配布した。

図7：各所に設置した意見収集のボード



(写真：中央区提供)

図8：『ふちのベトレジャーマップ』



(3) 成果と課題

本企画を通じた成果として以下の2点を挙げる。

1点目は、地域の方とのつながりの創出である。マップ作成の過程で、小中学校や公共施設への連絡・相談、マップ掲載店への取材など、地域の方とつながりを持つことができた。これにより、「わかば」の周知や大学と地域のつながりの強化に微力ながら貢献できたと考える。

2点目は、地域の方とともに地域の魅力を再発見する機会が持てた点である。意見募集を通じて地域の魅力を改めて考える機会となり、学生・地域の方々双方にとって地域への愛着醸成につながったといえる。また、マップという形に残る魅力発信ができたことで、今年度の活動が終わった後も、このマップを手にとっていただくことで継続的に魅力を届けることができるのではないだろうか。

一方、課題としては以下の2点が挙げられる。

1点目は中央区全体の魅力発信が不十分だったことである。今回のマップは淵野辺駅周辺に特化したため、中央区全体の魅力発信という点では不十分である。収集した意見には、淵野辺駅周辺以外のものも含まれていたが、エリアを限定したためそうした意見は反映することができなかった。今後、他のエリアのマップも作成し、シリーズ化することができれば、将来的には区全体を網羅した魅力発信ができるだろう。

2点目はマップ作成後の活動ができなかったことである。情報収集に多くの時間を費やしたため、マップ完成後の活動を十分に展開できなかった。当初は、マップ作成にそれほど時間がかからず、早い段階でマップを完成させ、完成後の企画も実施できると考えていた。しかし、学校や公共施設へのアポイントメントに想定以上の時間がかかってしまい、当初考えていた掲載店をめぐるスタンプラリー等、マップ作成後のイベントを実施することができなかった。一方でこの経験を通じて、計画にゆとりを持たせることの重要性や計画に変更が生じた際の柔軟な対応の仕方などを区役所の方からの助言を通して学ぶことができ、メンバーたちの成長にもつながったといえる。

地域のマップ作りは他大学のゼミ等でも見られ、それ自体が独自性のあるものとはいえない。そのため、ありきたりなマップになってしまうのではないかと葛藤が常にメンバーの間にあった。区職員の方からの助言も参考にし、メンバーの間で何度も協議を重ね、地域の方の意見を取り入れて地域とともに作り上げること、また「わかば」メンバーならではの視点で魅力を伝えることに本企画の独自性を見出すこととした。また、地域の学校等への連絡において、学外の方との電話でのやり取りが初めてで緊張するメンバーや、「わかば」の概要や目的を説明することに苦労したメンバーもいたが、コミュニケーションを重ねていく中で、学校の先生方や施設の職員の方々の温かい対応に触れ、また地域とのつながりが生まれたことを実感できたことで、活動のモチベーションも向上していった。

1年間という限られた期間の中ではあったが、試行錯誤を重ねることで完成度の高いマップを作ることができた。このマップが中央区の活性化の一助となることを期待したい。

9 2年目の成果および改善が見られた点

初年度はプロジェクト全体としての一体感醸成が課題であったが、今年度は初年度からの継続メンバーが各チームにいたことで、継続メンバーを通じたチーム間の交流や情報交換が生まれた。また、メディアチームのVlog取材を通してツアー・自由企画チームとの連携も見られ、メディアチームがある種本プロジェクト内の「メディア」（媒体）として機能したともいえる。全体ミーティングでも、机の配置変更やアイスブレイクの導入により、初年度よりも全体の一体感が高まったといえる。ただし、継続メンバーの有無という不確定要素に依存している面もあり、今後は継続メンバーがいなくてもチーム間の連携が促進される仕組みをコーディネーターとして検討すべきである。

また、「調査」の側面でも一部進展が見られた。自由企画チームによる「ふちのベトレジャーマップ」作りでは、淵野辺エリアの魅力的なスポットや飲食店をマップ化するため、近隣の小中学校や公共施設に掲示型アンケート調査を行っている。調査対象や実施場所の偏り、期間の短さといった課題はあったが、学生の主観だけでなく、少なくとも形式的には地域の人々が魅力とを感じる場所のマッピングができたといえよう。

ツアーチームによる区役所への企画書提出も、「調査」の側面における進展の一例である。ツアー実施後、今後の中央区事業としての展開を見据え、区の事業化を想定した企画提案を行っている。この際、他地域の行政主導型ツアー事例や、今回のツアー参加者アンケートの分析を踏まえて提案しており、地

域の魅力発信型ツアーの調査・提案という点で、初年度よりも進展が見られた。

10 今後の課題

前節で「調査」について触れたが、資料調査やインタビュー調査など、より深い調査という点ではやや弱さが残った。正課外教育では学生の主体性を重視するため、調査の有無や方法も学生の判断に委ねられる側面がある。ただ、地域魅力を本質的に発見・発信・創造するには、その地域特有の価値や魅力を的確に調査・分析することが重要である。例えば、中央区クイズの作成は地域を調べる一つの機会となったが、こうした取り組みを足がかりに、今後より調査的な活動の深化が望まれる。また、複数年かけて知見を蓄積していく視点も大切にしたい。今年度は継続メンバーが多く、経験を活かした企画が実現できたが、今後のメンバー交代を見据え、知識や経験を新たなメンバーにも継承する仕組み作りが求められる。特に活動初期に過去の活動内容を共有する機会を設けることが重要となる。

また、単年度ごとの活動としての限界も改めて見えてきた。各チームとも前期は専ら企画の検討・立案が中心であり、実質的な活動が動き出すのは後期に入ってからとなる。そのため、季節的に春や夏に実施すべき活動や、長期の準備を要する企画（オリジナル商品の開発や、新たなゆるキャラの提案など）については必然的にメンバーたちが挑戦することをあきらめてしまう。またCECや区役所としても単年度の成果として打ち出しにくく、活動内容が短期完結型に偏りがちである。前述の調査の側面の蓄積とも類似した課題であるが、長期的な検討や準備が必要な企画については、単年度の活動とは別に、継続的なテーマとして設定することも今後の課題として検討の余地がある。

11 おわりに

本稿では正課外教育としての本プロジェクトの実践を通して、その成果と課題を述べてきたが、正課プログラムのように限られた時間・範囲の中にとどまることなく、様々な自由度を持って学生の多様な成長を促すことができる点が正課外教育としての地域活性化プロジェクトの重要な価値である。

活動を通して地域の実態を知るとともに、どのような企画が地域の魅力を伝えられるのか、市や区、大学の制度内で実現可能な企画とするにはどう工夫するかなど、学生たちは日々多くを学んだ。また、自由企画チームがマップ作りの情報収集で小中学校や公共施設を訪れた際、メディアチームが地域の店舗や施設に取材に行った際、ツアーチームが関係者へ事前に説明へ出向いた際など、それぞれ本プロジェクトのことを説明し、協力を得るための依頼をする中で、自らの企画やその意義を簡潔にまとめて伝える力も養われたといえる。

正課外の活動は決して正課に比して重要性が劣るものではない。正課外教育研究分科会（2007：1-4）が指摘するように、大学が自主性や主体性を重視する学びの場であることの象徴であり、人間的成長の機会として、時に正課以上に重要な意味を持つこともある。正課と正課外の活動・教育は大学における教育・学修の両輪として等しく重要な活動ではないだろうか。本稿では紙幅の都合上、正課外教育による学生の成長については詳述しないが、大学関係者であれば少なからずその意義を経験的に知っているはずである。多忙な学生たちが大学生活の中で、こうした正課外教育としての地域活性化活動に参加することは、正課での学びやその他諸活動と同様、学生の成長、とりわけ人間的成長にとって極めて有意義なものであるといえよう。

謝辞

本プロジェクトは、相模原市中央区役所の地域振興課・区政策課の皆様による多大なご支援・ご協力のもと実施することができました。全体ミーティングの時間以外にも、各チームの活動に不可欠な存在として区職員の皆様に関わっていただき、学生たちにとって貴重な道標となっていたいただいと感謝しております。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

注

- (1) プロジェクト全体としての活動の流れは本稿末に資料1として表で示している。各チームの活動の流れについても同様である。
- (2) 全体ミーティング参加者の構成は、学生メンバー14名、コーディネーター2名、中央区職員7名(地域振興課4名・区政策課3名)である。区職員は業務の関係上参加人数が毎回異なるが、概ね各回4～7名参加していただいた。
- (3) 参加費は大人1,500円、小学生1,000円に設定した。これには当日の昼食代とアクアリウムの入館料が含まれる。

引用・参考文献

- 奥本素子・岩瀬峰代,「プロジェクトベースドラーニングにおける自発的行動分析」『日本教育工学会論文誌』36(3): 205-15, 2012.
- 杉岡秀紀,「大学と地域との地学連携におけるまちづくりの一考察」『同志社政策科学研究』9(1): 77-96, 2007.
- 正課外教育研究分科会編,『大学生が人間(ひと)として成長するために―正課外教育の重要性の再認識』日本私立大学連盟, 2007.
- 水谷耕平・「わかば」2023年度学生メンバー,「相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト「わかば」実践報告―プロジェクトの立ち上げ」『シビックエンゲージメント研究』(2): 37-57, 2024.
- 宮副謙司,「学生発NPOの取り組みから考えるコミュニティ・ベースト・ラーニング(CBL)」『組織学会大会論文集』7(2): 344-9, 2018.

資料

資料1：プロジェクト全体の流れ

	活動日	項目	内容	参加者／活動者数
1	2024/4/2	告知	CECWEBサイト、学生ポータルでプロジェクトのメンバー募集告知開始。その他CEC教員の担当授業等でも告知。（申込締切：5月6日）	
2	2024/4/24	説明会	オンライン	学生18名、区職員※1 6名、Co※2 1名
3	2024/5/15	第1回全体MTG※3	顔合わせ、プロジェクトの進め方や目標の共有。 全体MTGは全て相模原キャンパス内の教室で対面実施。	学生メンバー13名、Co2名
4	2024/5/29	第2回全体MTG	チーム分け、担当決め、中央区勉強会	学生メンバー14名、区職員6名、Co2名
5	2024/6/8	相模原市中央区を知るためのツアー	相模原市立博物館、JAXA相模原キャンパス、にここ星ふちのべ商店会、相模原スポーツ・レクリエーションパークを訪問	学生メンバー11名、区職員3名、Co2名
6	2024/6/19	第3回全体MTG	プロジェクトの進め方について、各チーム企画案発表	学生メンバー12名、区職員6名、Co2名
7	2024/7/17	第4回全体MTG	昨年度プロジェクトの実践報告共有、相模原祭出展内容検討、各チーム企画実施計画発表	学生メンバー13名、区職員7名、Co1名
8	2024/9/13	自由企画チーム※4	マップ作成のための調査活動を開始	
9	2024/10/12-13	大学祭	相模原祭に教室企画として出展（3プロジェクト合同）	学生メンバー6名、他プロジェクト学生・CEC学生スタッフ15名
10	2024/10/16	第5回全体MTG	相模原祭報告、共和中学校福祉体験講座発表者決め、各チーム進捗状況報告	学生メンバー12名、区職員4名、Co2名
11	2024/10/18※5	メディアチーム	中央区公式Instagramでの『さがみんVlog』投稿開始	
12	2024/11/20	中間報告会／第6回全体MTG	各チームこれまでの活動と今後の計画報告	学生メンバー13名、区職員9名、CEC4名※6
13	2024/11/24	ツアーチーム	わくわく中央区バスツアー実施	一般参加者20名、企画学生5名、区職員4名、Co1名、他学生2名※7
14	2024/11/29	活動紹介	共和中学校福祉体験講座で活動内容の紹介と高齢者疑似体験補助	学生メンバー3名、他プロジェクト学生4名、Co2名
15	2024/12/18	第7回全体MTG	共和中学校福祉体験講座の報告、各チーム進捗状況報告	学生メンバー10名、区職員5名、Co1名
16	2025/1/15	第8回全体MTG	各チーム進捗状況報告	学生メンバー10名、区職員5名、Co1名
17	2025/2/26	第9回全体MTG	各チーム進捗状況報告、CEC紀要投稿前最終確認	学生メンバー10名、区職員7名、Co1名
18	2025/2/28	CEC紀要	実践報告原稿提出	学生メンバー14名、Co1名
19	2024/3/12	活動報告会	プロジェクト全体の説明、各チームの活動報告と質疑応答、関係者からの講評	学生メンバー12名、区職員9名、CEC5名※8、その他1名※9

※1 区職員＝相模原市中央区役所職員
（各チームの表においても同様）

※2 Co＝コーディネーター
（各チームの表においても同様）

※3 MTG＝ミーティング
（各チームの表においても同様）

※4 個別チームの活動については第6節以降を参照
（ツアーチーム、自由企画チームも同様）

※5 予告投稿は10/4

※6 正副センター長各1名、コーディネーター2名

※7 メディアチーム学生1名、CEC学生スタッフ1名

※8 正副センター長各1名、コーディネーター2名、職員1名

※9 学内教員

（出典：筆者作成）

資料2：メディアチームの活動の流れ

	活動日	項目	内容	参加者／活動者数
1	2024/5/29	第2回全体MTG	全体MTG内でチーム内の役割決め	チームメンバー4名
2	2024/6/12	チームMTG	企画について案出し	チームメンバー4名
3	2024/6/19	第3回全体MTG	企画案報告、企画内容について区政策課と意見交換	チームメンバー4名、区職員3名
4	2024/6/26	チームMTG	企画内容検討、ストーリーのカバー画像作成	チームメンバー4名
5	2024/7/17	第4回全体MTG	企画案報告、企画内容について区政策課と意見交換	チームメンバー4名、区職員3名
6	2024/8/3	チームMTG	今後の進め方の相談・スケジュールの共有方法の相談	チームメンバー3名
7	2024/8/22	チームMTG	撮影場所の検索、スケジュールの検討	チームメンバー3名
8	2024/8/30	チームMTG	撮影場所の案の共有、第1回さがみんVlogのルート作成	チームメンバー3名
9	2024/9/9	区政策課への報告	メールにて第1回の案を報告、区政策課のフィードバック	チームメンバー1名、区職員1名
10	2024/9/17	市役所訪問・撮影	さがみんマスコットの受け取り、 さがみんVlog導入編の撮影@上矢部公園	チームメンバー2名、 区職員1名
11	2024/9/25	チームMTG	動画編集、予告投稿の作成、投稿頻度の検討	チームメンバー3名
12	2024/9/27-10/3	投稿準備	区政策課とやり取り、フィードバックをもとに動画修正	チームメンバー3名、区職員1名
13	2024/10/4	投稿	連携企画開始の告知投稿、さがみんVlog導入編の投稿	
14	2024/10/10	撮影	さがみんVlog秋の味覚編の撮影@Pizza Restaurant OH! GOD	チームメンバー1名
15	2024/10/12	撮影	さがみんVlog青学編の撮影@淵野辺駅、本学相模原キャンパス	チームメンバー2名
16	2024/10/16	チームMTG・撮影	さがみんVlog青学編の撮影@本学相模原キャンパス、動画編集	チームメンバー4名
17	2024/10/16	第5回全体MTG	さがみんVlog青学編の共有、区政策課のフィードバック	チームメンバー3名、区職員1名
18	2024/10/17	投稿準備	フィードバックをもとに動画修正	チームメンバー1名
19	2024/10/18	投稿	さがみんVlog青学編の投稿	
20	2024/10/26	取材同行・撮影	区政策課の取材に同行、さがみんVlog矢部編の撮影@セラセゾン	チームメンバー1名、区職員2名
21	2024/10/30	撮影	さがみんVlog矢部編の撮影@矢部駅、矢部城跡、 さがみんVlog秋の味覚編の撮影@おはようパン工房	チームメンバー2名
22	2024/10/30	投稿準備	さがみんVlog矢部編の動画編集、投稿文の作成	チームメンバー1名
23	2024/11/1	投稿	さがみんVlog矢部編の投稿	
24	2024/11/14	投稿準備	さがみんVlog秋の味覚編の動画編集、投稿文の作成	チームメンバー1名
25	2024/11/15	投稿	さがみんVlog秋の味覚編の投稿	
26	2024/11/20	チームMTG	投稿スケジュールの作成、毎回テーマの設定	チームメンバー3名
27	2024/11/20	中間報告会、 第6回全体MTG	これまでの活動の報告、区政策課のフィードバック	チームメンバー3名、 区職員3名
28	2024/11/22	撮影	さがみんVlog紅葉編の撮影@本学相模原キャンパス、鹿沼公園	チームメンバー1名
29	2024/11/24	撮影	ツアーチーム主催のバスツアーに同行、 さがみんVlog中央区バスツアー編の撮影	チームメンバー1名
30	2024/11/25	撮影	さがみんVlog紅葉編の撮影@横山公園、道歩川公園	チームメンバー1名
31	2024/11/27	投稿準備	さがみんVlog紅葉編の編集、投稿文の作成	チームメンバー2名
32	2024/11/29	撮影	さがみんVlog冬のイルミネーション編の撮影@本学相模原キャンパス	チームメンバー2名
33	2024/11/29	投稿	さがみんVlog紅葉編の投稿	
34	2024/12/4	チームMTG	投稿スケジュール、今後の撮影場所の検討	チームメンバー4名
35	2024/12/4-6	投稿準備	さがみんVlog中央区バスツアー編の編集、区政策課とやり取り	チームメンバー1名、区職員1名
36	2024/12/6	投稿	さがみんVlog中央区バスツアー編投稿	
37	2024/12/8	撮影	さがみんVlog冬のイルミネーション編の撮影@大野北公民館	チームメンバー1名
38	2024/12/9	撮影	さがみんVlog冬のイルミネーション編の撮影@本学相模原キャンパス、淵野辺駅	チームメンバー1名
39	2024/12/18	チームMTG	さがみんVlog冬のイルミネーション編の編集、今後の撮影場所の検討	チームメンバー3名
40	2024/12/18	第7回全体MTG	これまでの活動の報告、区政策課のフィードバック	チームメンバー3名、区職員2名
41	2024/12/18	撮影	さがみんVlog冬のイルミネーション編の撮影@さがみ夢大通り商店街	チームメンバー1名
42	2024/12/19	投稿準備	さがみんVlog冬のイルミネーション編の編集、区政策課とのやり取り	チームメンバー1名、区職員1名
43	2024/12/20	投稿	さがみんVlog冬のイルミネーション編の投稿	
44	2024/12/23	撮影	さがみんVlog年末年始編の撮影@亀が池八幡宮、上溝商店街	チームメンバー1名
45	2024/12/25-26	投稿準備	さがみんVlog年末年始編の編集、投稿文の作成、区政策課とのやり取り	チームメンバー1名、区職員1名
46	2024/12/27	投稿	さがみんVlog年末年始編の投稿	
47	2024/12/27	撮影	さがみんVlogスポーツ編の撮影@相模原スポーツ・レクリエーションパーク	チームメンバー1名
48	2025/1/6	撮影	さがみんVlogスポーツ編の撮影@相模原スポーツ・レクリエーションパーク	チームメンバー1名
49	2025/1/6-9	投稿準備	さがみんVlogスポーツ編の編集、区政策課とのやり取り	チームメンバー1名、区職員1名
50	2025/1/10	投稿	さがみんVlogスポーツ編の投稿	
51	2025/1/15	チームMTG	今後の撮影場所の検討、広報紙で扱う文学賞の閲読	チームメンバー2名
52	2025/1/15	第8回全体MTG	今までの活動の報告、区政策課のフィードバック	チームメンバー2名、区職員2名
53	2025/1/17	取材同行・撮影	『広報さがみはら』撮影のため、区政策課の取材に同行	チームメンバー3名、区職員2名
54	2025/1/20	撮影	さがみんVlog合格祈願編の撮影@村富神社、氷川神社	チームメンバー1名
55	2025/1/22-23	投稿準備	さがみんVlog合格祈願編の編集、投稿文の作成	チームメンバー1名
56	2025/1/24	投稿	さがみんVlog合格祈願編の投稿	
57	2025/1/30	コメント作成	『広報さがみはら』「ちゅうおう区版」のコメント作成	チームメンバー3名
58	2025/2/1	撮影	さがみんVlog淵辺義博編の撮影@龍像寺、中里橋、縁切り榎	チームメンバー1名
59	2025/2/2-7	投稿準備	さがみんVlog淵辺義博編の編集、投稿文の作成、区政策課とのやり取り	チームメンバー2名、区職員1名
60	2025/2/7	投稿	さがみんVlog淵辺義博編の投稿	
61	2025/2/16	撮影	さがみんVlog自由企画マップ巡り編の撮影@銀河の森プレイパーク、淵野辺公園、龍像寺	チームメンバー1名
62	2025/2/17	撮影	さがみんVlog自由企画マップ巡り編の撮影@上海ジミー	チームメンバー1名
63	2025/2/19	投稿準備	さがみんVlog自由企画マップ巡り編の編集、投稿文の作成	チームメンバー1名
64	2025/2/21	投稿	さがみんVlog自由企画マップ巡り編の投稿	
65	2025/2/26	第9回全体MTG	今までの活動の報告、区政策課のフィードバック	チームメンバー4名、区職員3名
66	2025/2/26-3/6	投稿準備	さがみんVlog総集編の編集、投稿文の作成	チームメンバー1名
67	2025/3/7	投稿	さがみんVlog総集編の投稿	
68	2025/3/12	活動報告会	これまでの活動の報告	チームメンバー5名、区職員2名

(出典：筆者作成)

資料3：ツアーチームの活動の流れ

	活動日	項目	内容	参加者／活動者数
1	2024/5/29	第2回全体MTG	全体MTG内でチーム内の役割決め	チームメンバー5名
2	2024/6/10	チームMTG	プロジェクトのテーマ決め、訪問地の検討	チームメンバー5名
3	2024/6/19	第3回全体MTG	訪問地候補についての下調べ	チームメンバー4名
4	2024/7/5	チームMTG	ツアーのテーマ決定、ツアーのプラン検討	チームメンバー5名
5	2024/7/17	第4回全体MTG	ツアー時期、予算、時間決め	チームメンバー5名
6	2024/7/21	チームMTG	ツアー下見する候補地の検討	チームメンバー5名
7	2024/8/1	ツアー下見	ツアールート下見、ルートと参加人数の検討	チームメンバー5名
8	2024/8/2	チーム内作業	ツアー下見に関するレポート作成	チームメンバー1名
9	2024/8/15	チームMTG	施設への依頼、アンケート項目の確認	チームメンバー5名
10	2024/8/31	チームMTG	ポスター作製	チームメンバー2名
11	2024/9/13	チームMTG	事前、当日の役割確認	チームメンバー5名
12	2024/9/13	チームMTG	施設のアガ取り	チームメンバー1名
13	2024/9/20	チーム内作業	ポスター修正	チームメンバー2名
14	2024/9/29	チーム内作業	ポスター修正	チームメンバー2名
15	2024/10/1	チームMTG	スケジュール確認、申し込み・連絡関係の確認	チームメンバー5名、 区職員2名
16	2024/10/1	チーム内作業	ツアーパンフレット作製	チームメンバー3名
17	2024/10/3	チーム内作業	参加者アンケート作成	チームメンバー1名
18	2024/10/5	チーム内作業	Instagramサムネ作成	チームメンバー1名
19	2024/10/8	チーム内作業	施設紹介文作成	チームメンバー1名
20	2024/10/16	第5回全体MTG	作成物確認、募集開始	チームメンバー5名、 区職員2名
21	2024/10/17	チーム内作業	アンケート作成	チームメンバー1名
22	2024/11/1	チーム内作業	パンフレット作製	チームメンバー1名
23	2024/11/20	中間報告会、 第6回全体MTG	これまでの活動の報告	チームメンバー 5 名
24	2024/11/24	ツアー当日	小学生の親子向けバスツアー開催	チームメンバー5名、 他学生メンバー2名、 区職員3名、Co1名
25	2024/11/25	チーム内作業	アンケート集計	チームメンバー1名
26	2024/12/13	チームMTG	ツアーの反省、これからの活動について	チームメンバー4名、 区職員2名
27	2024/12/18	第7回全体MTG	ツアーの報告、活動報告書の役割分担	チームメンバー3名、 区職員1名
28	2025/1/3	チーム内作業	報告書作成	チームメンバー5名
29	2025/1/15	第8回全体MTG	区長への報告日時調整、報告書作成	チームメンバー5名
30	2025/2/26	第9回全体MTG	進捗状況報告	チームメンバー3名、区職員2名
31	2025/3/12	区長報告	中央区区長・副区長にツアー実施の報告と提案発表	チームメンバー5名、 区職員2名、Co1 名
32	2025/3/12	活動報告会	これまでの活動の報告	チームメンバー5名、区職員2名

(出典：筆者作成)

資料4：自由企画チームの活動の流れ

	活動日	項目	内容	参加者／活動者数
1	2024/6/5	チームMTG	企画について案出し	チームメンバー5名
2	2024/6/13	チームMTG	企画案深掘り、1年の活動計画	チームメンバー5名
3	2024/6/19	第3回全体MTG	企画案報告、企画内容について意見交換	チームメンバー4名、区職員2名
4	2024/6/26	チームMTG	企画決定、企画内容検討	チームメンバー4名
5	2024/6/30	チームMTG	台紙設置施設検討、マップテーマの案出し、企画の進め方検討	チームメンバー4名
6	2024/7/2	連絡等	LINEにて区職員に企画案を共有、フィードバック	チームメンバー、区職員
7	2024/7/10	チームMTG	フィードバックをもとに改善、「わかばらしさ」の検討	チームメンバー5名
8	2024/7/17	第4回全体MTG	企画案報告、フィードバック	チームメンバー4名、区職員2名
9	2025/7/18	チームMTG	台紙設置施設への交渉・設置時期・設置期間検討、ターゲット決定、マップタイトル案出	チームメンバー4名
10	2024/7/21	チームMTG	企画書とポスターの作成、担当施設決定、マップタイトル決定	チームメンバー4名
11	2024/7/31	チームMTG	企画書とポスターの内容確認、スケジュール確認	チームメンバー5名
12	2024/8/6	連絡等	LINEにて区職員に企画書とポスターを共有、フィードバック	チームメンバー、区職員
13	2024/8/7	チームMTG	企画書とポスターの修正、アポイントメントの内容確認	チームメンバー4名
14	2024/8/8-26	連絡等	電話にて台紙設置施設へ協力依頼、企画書送付	チームメンバー5名
15	2024/8/27	チームMTG	小学校からの質問検討、下見の日程決定	チームメンバー3名
16	2024/9/4	施設訪問	大野北公民館の下見	チームメンバー1名
17	2024/9/12	施設訪問	大野北中学校の下見と打ち合わせ	チームメンバー1名
18	2024/9/13	施設訪問	大野北小学校、共和小学校、弥栄中学校に台紙を設置、市立図書館の下見	チームメンバー2名
19	2024/9/23	チームMTG	台紙の回収担当と日程の決定、設置時期がずれる施設への対応について	チームメンバー5名
20	2024/9/26	連絡等	LINEにて区役所への台紙設置の依頼	チームメンバー、区職員
21	2024/9/29	施設訪問	市立図書館、大野北公民館に台紙を設置	チームメンバー2名
22	2024/10/3	施設訪問	大野北小学校、共和小学校、弥栄中学校の台紙を回収	チームメンバー2名
23	2024/10/4	施設訪問	相模原市立博物館に台紙を設置	チームメンバー2名
24	2024/10/10	その他	区役所に台紙を設置	区職員
25	2024/10/15	施設訪問	大野北中学校に台紙を設置	チームメンバー1名
26	2024/10/16	施設訪問	市立図書館、大野北公民館、相模原市立博物館の台紙を回収	チームメンバー4名
27	2024/10/16	第5回全体MTG	企画進捗報告、おすすめスポットとグルメをアンケート回答依頼、マップのレイアウト検討、スケジュール確認	チームメンバー4名
28	2024/10/18	チームMTG	回収した台紙をもとに集計、マップのレイアウトの概形決定	チームメンバー4名
29	2024/10/24	チームMTG	掲載場所決定、取材担当の振り分け、マップに載せる地図作成	チームメンバー4名
30	2024/11/1	チームMTG	取材内容確認、マップ作成後の活動の案出し	チームメンバー4名
31	2024/11/3	チームMTG	マップのテンプレート選定、中間報告会の分担決め、マップ作成後の活動について深掘り	チームメンバー3名
32	2024/11/5	チームMTG	回収した台紙をもとに集計	チームメンバー3名
33	2024/11/12	取材	鴨と蟹中華そば鷺、上海ジミーでマップ掲載の許可取りと写真撮影	チームメンバー4名
34	2024/11/12-13	チーム内作業	LINEにてマップのレイアウトの詳細決定	チームメンバー5名
35	2024/11/15	連絡等	区職員にマップのレイアウトを共有	チームメンバー、区職員
36	2024/11/15	取材	内のハッピーでマップ掲載の許可取りと写真撮影	チームメンバー1名
37	2024/11/18	チーム内作業	LINEで連絡をしながらマップレイアウトの修正	チームメンバー5名
38	2024/11/19	連絡等	区職員にマップのレイアウト(修正版)を共有	チームメンバー、区職員
39	2024/11/20	中間報告会、第6回全体MTG	企画進捗報告、マップ印刷部数決定、マップ配布先検討	チームメンバー4名、区職員2名
40	2024/11/20	取材	大衆鉄板酒場でてんでんでマップ掲載の許可取りと写真撮影	チームメンバー5名
41	2024/11/22	取材	石臼挽きそば加寿屋でマップ掲載の許可取りと写真撮影	チームメンバー1名
42	2024/12/1	チームMTG	マップ配布先と部数決定	チームメンバー5名
43	2024/12/3	連絡等	区職員にマップ配布先と部数の共有	チームメンバー、区職員
44	2024/12/3	取材	ソラ珈琲&食堂ヒュッテでマップ掲載の許可取りと写真撮影、マンホールの写真撮影	チームメンバー3名
45	2024/12/5	取材	ゆめづくりパン工房淵野辺店でマップ掲載の許可取りと写真撮影、マンホールの写真撮影	チームメンバー2名
46	2024/12/10	取材	石臼挽きそば加寿屋でマップ掲載の許可取りと写真撮影	チームメンバー1名
47	2024/12/17	チームMTG	掲載場所の紹介文作成、マップのデザイン修正	チームメンバー5名
48	2024/12/18	第7回全体MTG	企画進捗報告、マップ配布先と部数の調整	チームメンバー4名、区職員2名
49	2024/12/19-2025/1/7	連絡等	相模原市立博物館の掲載内容を博物館職員に確認、修正	チームメンバー、区職員
50	2024/12/22	取材	銀河の森プレイパークでマップ掲載の許可取りと写真撮影、マンホールの写真撮影	チームメンバー1名
51	2025/1/8-13	チーム内作業	銀河の森プレイパークの紹介文作成、掲載写真決定	チームメンバー5名
52	2025/1/14-21	連絡等	銀河の森プレイパークの掲載内容を担当者に確認	チームメンバー、区職員
53	2025/1/15	取材	マンホールの写真撮影	チームメンバー1名
54	2025/1/15	第8回全体MTG	企画進捗報告、印刷業者との連絡スケジュール確認	チームメンバー3名
55	2025/1/21-22	チーム内作業	LINEで連絡しながら、区職員からの校正依頼の内容確認、変更内容決定	チームメンバー5名
56	2025/1/22-27	チーム内作業	LINEで連絡しながら、印刷業者が作成したマップの変更点確認とそれに対する意見出し	チームメンバー5名
57	2025/1/27	連絡等	区職員に、印刷業者へのマップの修正依頼内容の共有	チームメンバー、区職員
58	2025/2/3-5	連絡等	業者と連絡、マップの校閲	
59	2025/2/13	チーム内作業	ふちのベトレジャーマップ納品	
60	2025/2/21	Vlog	メディアチームとコラボ(Vlog)	
61	2025/2/26	広報	中央区公式Instagramにてマップの完成報告	
62	2025/2/26	第9回全体MTG	進捗状況報告	チームメンバー3名
63	2025/2/27-3/5	チーム内作業	マップ配布（公共施設へは区役所から一斉配布、小中学校と掲載店へは直接訪問）	
64	2025/3/12	活動報告会	これまでの活動報告	チームメンバー3名、区職員1名

(出典：筆者作成)

Ⅱ シビックエンゲージメントセンター活動報告

2024（令和 6）年能登半島地震への対応

2024 年 1 月 1 日に能登半島地方で発生した地震発生を受け、青山学院大学シビックエンゲージメントセンターでは、遠隔地で発生した災害への対応として、2023 年度に引き続き以下の活動を実施した。（2024 年 1 月～ 3 月に実施した活動は、シビックエンゲージメント研究第 2 号に掲載）

募金活動

昨年度の第一次緊急支援募金活動に続き、第二次緊急支援募金活動は 4 月 1 日から 30 日の期間に行った。学内に設置した募金箱には総額 1,070,845 円が寄せられ、第一次と同様に 3 つの団体に分配する形で寄付した。

能登半島地震 募金にご協力
お願いします



©時事通信社



<募金受付期間>
二次受付は4月1日(月)～4月30日(火)まで

<募金箱設置場所(両キャンパス共通)>
シビックエンゲージメントセンター内
セブンイレブン、購買会(JVCS)
ガウチャー記念礼拝堂入口、ウェスレー・チャペル入口
宗教センター内

いただいたご支援は、キリスト教団体や被災地を支援する NPO・ボランティア団体に寄付させていただきます。

青山学院大学シビックエンゲージメントセンター 青山学院宗教センター

<募金概要>

能登半島地震 緊急支援募金（二次）		
期間	2024 年 4 月 1 日（月）～ 30 日（火）	
実施体制	青山キャンパス	シビックエンゲージメントセンター 宗教センター ガウチャー記念礼拝堂入口 青山学院購買会（株式会社アイビー・シー・エス） セブンイレブン
	相模原キャンパス	シビックエンゲージメントセンター ウェスレー・チャペル入口 青山学院購買会（株式会社アイビー・シー・エス） セブンイレブン
募金総額	1,070,845 円	
寄付先	日本基督教団中部教区 認定 NPO 法人パルシック 輪島 KABULET（社会福祉法人佛子園）	

ボランティア・シビックエンゲージメントプログラム

事業名	渋谷おとなりサンデー参加・記録学生スタッフ
日時	2024年6月2日(日) 9:30～15:00
場所	渋谷区全域
参加人数	5名
内容	7年目の開催となる「渋谷おとなりサンデー」に、渋谷区の広報協力として学生スタッフが各地で催されている企画を訪問し、活動参加のほか写真撮影等を行った。
成果	5名の参加となった(学部2年生2人、学部3年生2人、大学院2年生1人)。うち3名は昨年に続き参加をしているリピーターである。2つのグループに分かれ、午前午後と異なる地域のふたつの催しをそれぞれが訪問し、主催者に話を聞いたり、活動の記録写真を撮影したりしながら、取り組みについて理解を深めた。また渋谷区の職員としてのキャリアに関心がある学生にとっては、区の担当職員と交流し、将来の選択について考える機会にもなった。
協力団体	渋谷区地域振興課




事業名	笹塚小学校 夏の学習支援ボランティア
日時	2024年8月27日(水)～29日(金) 8:25～11:30
場所	渋谷区立笹塚小学校
参加人数	8月27日: 28名、8月28日: 33名、8月29日: 22名
内容	一般社団法人TEN-SHIP アソシエーション 戸所氏、聖心女子大学 杉原先生、シブヤボランティアセンターとの共催企画として、夏休みの補習として3日間にわたり渋谷区立笹塚小学校での学習支援活動を行った。 同校では、夏休み最後の3日間、ボランティアスタッフの協力を得ながら個々の児童により丁寧に関わることで、一人ひとりの可能性を伸ばしてもらいたいという思いで補習が行われている。本活動では、主に児童が夏休みの課題やプリント学習でつまづいている内容や分からない内容を中心に、参加したボランティア学生が個別にサポートを行った。 この期間、1～6年生の各学年3クラス(計18クラス)の教室に2～9名の児童が登校しており、それぞれの教室で数名のボランティア(他校の生徒・他大学の学生も含む)がサポートする体制となった。算数、国語、音楽等、クラスによって取り組む教科や内容は異なり、担任教諭の指示に従い活動した。補習終了後は、各クラスで5～10分程度、当日の活動について担任から助言をいただき、ボランティアから報告・相談等を行う振り返りの時間が設けられた。
成果	ボランティアという形で、身近なお兄さんやお姉さんのように寄り添い一緒に考える存在として関わる学生の姿勢・活動への評価は高く、校長先生からも、今回だけではなく引き続きこのような活動に関わっていただきたいというお話をいただいた。 また、参加した学生からも、今後も笹塚地域にかかわる活動へ参加を希望する学生も多くいたことから、今後も夏期休暇期間に参加できる1dayボランティアとしての側面と、継続的に活動に取り組みたい学生向けの両方に発展可能な活動であると考えている。

協力団体	渋谷区立笹塚小学校、一般社団法人 TEN-SHIP アソシエーション、聖心女子大学、渋谷ボランティアセンター
	

事業名	夏の草むしり隊ボランティア
日時	2024年9月4日(水)、9月11日(水)、9月18日(水) 9:00～11:30
場所	渋谷区笹塚・幡ヶ谷地域
参加人数	学生スタッフ16名(参加回数 1日のみ10名、2日間5名、3日間1名) 9月4日:7名、9月11日:7名、9月18日:9名
内容	一般社団法人 TEN-SHIP アソシエーションと連携し、渋谷区笹塚エリアの戸建て住宅や都営団地の庭を中心に、草むしり活動を3日間にわたって実施した。CEC 青山学生スタッフが笹塚・幡ヶ谷エリアの5つのお宅を訪問し、活動を行った。 活動前後では代表の戸所さんより、高齢化や独居住民の増加等による地域課題について、草むしり活動を通じた住民への生活相談によるアウトリーチ機能や、継続的な見守り支援の重要性をお話いただいた。
成果	同じ渋谷区にあるキャンパスに通っていないながら、ほとんどが笹塚に来たことがない学生スタッフがコミュニティ活動に参加した。前年度に比べて、参加する学生数が増えたので、二日間は、2チーム体制で行い、エリアの異なる、また住宅タイプの異なるさまざまなお宅を訪問することができた。 参加した学生の声は近々ウェブサイトにはレポートとして報告予定だが、草むしりという単純労働に見えるものを通じて、地域社会の問題を具体的に感じ、実際に動くなかで人と人のつながりや、活動の面白さ、やりがいなどをどの学生も実感したようで、「涼しくなったらもっとたくさんやりたい」という声も出ている。
協力団体	一般社団法人 TEN-SHIP アソシエーション



事業名	笹塚プロジェクト
日時	2024年11月16日(土)(17:15～18:30)、2024年11月30日(土)(17:00～18:30)、 2024年12月15日(日)(13:00～16:00)、2025年1月19日(日)(14:00～17:00)、 2025年2月16日(日)(14:00～17:00)、2025年3月16日(日)(14:00～17:00)
場所	笹塚十号のいえ
参加人数	学生スタッフ7名
内容	渋谷区笹塚の笹塚通り商店街で八百屋の旧店舗を改装して2024年2月よりコミュニティスペース「笹塚十号のいえ」がスタートした。本事業では「屋根のある公園」というコンセプトで、地域の人々が世代や障害の有無等に関わらず、ともに過ごせ、つながりを得られることを目指す「笹塚十号のいえ」で、青学生が自らの強みを活かして自主企画を行い、大学生として地域づくりに主体的に関わっていく。
成果	2024年10月から、CEC 青山学生スタッフ7名が「笹塚チーム」として、チームミーティングや現地の見学、TEN-SHIP アソシエーション代表の戸所さんとの打ち合わせを継続的にを行い、11月に2度、単発企画を行った(ビンゴ大会、カップインピンポン)。 2024年12月からは、継続的な学生企画として野菜や八百屋のコンセプトカフェを「青野菜カフェ」という名称で、「笹塚十号のいえ」の営業日外の日曜日に月に一度実施することになった。青野菜カフェでは「青野菜メニュー」の提供と、お楽しみ企画の実施を行い、商店街を訪れた人たちが世代を問わず楽しめる場づくりを目指して、毎月第三日曜日に実施していくこととなった。 2024年12月は「野菜クラッカー アボカドディップ添え」の提供と「クリスマスツリーのオーナメントづくり」の実施、2025年1月は「野菜クラッカー アボカドディップ添え」「オニオンスープ」の提供と「輪投げ」の実施、2月には「野菜クラッカー アボカドディップ添え」「野菜スープ」(市販)の提供と「ボウリング」の実施、3月は「野菜クラッカー アボカドディップ/梅マヨディップ添え」「野菜スープ」(市販)の提供と「輪投げ」の実施を行った(提供については、両回ともに無料で行った)。
共催団体	一般社団法人 TEN-SHIP アソシエーション



事業名	青山祭に行こう！
日時	2024年11月3日（日）9:30～13:00
場所	青山学院大学青山キャンパス
参加人数	学生スタッフ4名
内容	障害のある子どもの移動支援を行っている合同会社結び-meと連携し、普段お出かけに制限が出てしまいがちな子どもたちに青山祭に来てもらった。大勢の人でにぎわう大学祭を訪れてその雰囲気を感じながら、興味関心に応じて色々な企画を楽しめるように大学生がエスコートをしたり、自らが所属するサークル等で行っている催しに子どもたちを迎えたりする機会を設けた。
成果	結び-meの移動支援を利用している4名の子どもと親御さん、支援スタッフがチームごとに大学生と一緒に様々なサークル等が行っている催しをめぐって楽しみ、出店で売られているものを選んで昼ご飯を食べた。鉄道愛好会やスポーツチャンバラ同好会の企画に参加したり、色々な出店のなかから好きなものをそれぞれが選んだり、障害のある子どもたちが普段なかなかできない経験をしてもらう機会を、子どもたちとの交流を楽しみながら行うことができ、子ども、学生のみならず同伴した支援スタッフや親御さんにも楽しんでもらっている様子だった。
協力団体	合同会社結び-me



事業名	笹塚小学校学習支援・居場所づくり「水曜塾（仮）」
日時	2025年1月8日（水）～3月19日（水）（全10回）13:15～14:30
場所	笹塚小学校
参加人数	9名
内容	2023年8月、2024年8月に夏休みの夏期補習の学習ボランティア活動を行った笹塚小学校で学習のサポートが手薄になりがちな低学年（2年生、3年生）を対象に、居場所づくりも兼ねた継続的な学習支援を「水曜塾（仮）」という名称で、2025年1月から3月までトライアル実施することになった。 「水曜塾（仮）」には各学年15名ほどが参加し、実施日には13:15～14:00で学習、14:00～14:30でレクリエーションを行った。
成果	1月～3月はトライアル実施となり、集団で学ぶことが難しい子どもたちが途中で参加をやめてしまうこともあったが、2年生、3年生ともに子どもたちが回を重ねるごとに「水曜塾」を楽しみにしている様子が見られた。ボランティア参加する大学生も、最初は子どもたちの対応に悩むような場面もたびたび見られたが、毎回終了後に振り返りを対面、LINEグループで行うなかで、小学校教員からのアドバイスも得ながら、子どもへの対応力を身につけていく成長も見られた。聖心女子大学の学生とともに活動するなかで青山学院大学の学生が受ける刺激も大きかったようである。

協力団体 笹塚小学校、TEN-SHIP アソシエーション、聖心女子大学



事業名	相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト（わかば）
日時	2024年5月15日（水）～2024年3月12日（水）
場所	相模原市中央区内
参加人数	14名
内容	相模原キャンパスの所在地である相模原市中央区について、学生の目線で同地域の魅力を発掘し、発信する活動を学生自ら企画・実施するプロジェクトである。この活動を通して相模原地域（特に大学周辺地域）に対する学生の理解を深めるとともに、地域活動への参加意欲を高めることを狙いとした。 プロジェクト内に①メディアチーム、②ツアーチーム、③自由企画チームの3チームを構成し、各チームがそのテーマに合わせた活動を企画・実施した。毎月1回のプロジェクト全体ミーティングに加え、チームごとのミーティング、そしてチームごとの企画の準備等随時実施している。 <全体での活動> ・毎月1回の全体ミーティング ・シビックエンゲージメントセンター紀要『シビックエンゲージメント研究』への論文（実践報告）投稿 ・6月8日（土）：相模原市中央区を知るためのツアー（相模原市立博物館、JAXA 相模原キャンパス、にここ星ふちのべ商店街、相模原スポーツ・レクリエーションパーク、小山公民館） ・10月12日（土）・13日（日）：相模原祭（大学祭）教室企画出展（藤野プロジェクト、相武台団地活性化プロジェクトとの合同出展） ・11月20日（水）：中間報告会 ・11月29日（金）：共和中学校福祉体験講座での活動紹介・高齢者疑似体験補助（相武台団地活性化プロジェクトの活動に藤野プロジェクトと共に協力） ・3月12日（水）：活動報告会 <メディアチームの活動> ・中央区公式 Instagram への企画投稿「さがみん Vlog」（10月以降月2～3回、合計13本投稿） ・『広報さがみはら』中央区版ページへの企画参加 <ツアーチームの活動> ・11月24日（日）：市内の小学生と保護者を対象とした「わくわく中央区バスツアー」を実施（史跡田名向原遺跡、相模田名民家資料館、割烹旅館旭屋、アクアリウムさがみはら） <自由企画チームの活動> ・『ふちのべトレジャーマップ』を作成：淵野辺周辺のおすすめスポット・グルメを地域住民から意見収集し作成、メンバーが取材をしてマップ化。

成 果	今年度は昨年度からの継続メンバーが多かった（14 名中 9 名）こともあり、昨年度よりも一体感を持った活動ができた。企画についても『ふちのベトレジャーマップ』で取り上げた場所や「わくわく中央区バスツアー」の様子を「さがみん Vlog」に取り上げるなど、チーム間で連携した取り組みが実施できていた点が、昨年度よりも進展が見られた例である。今年度の目標を「中央区の魅力の深堀り」としたが、各チーム、またメンバーそれぞれが昨年度よりも深い企画の検討、学びを行えたといえる。昨年度に引き続き、相模原市中央区役所の職員の方々に多大なご協力をいただき、特にツアーチームのバスツアーではバスの手配や予算面で区の資源を提供いただいた。学生たちにとって社会人の仕事を身近に見る機会であるとともに、市の予算を使うことの意味や、その際の企画書・報告書の作成等を通して学ぶことが多かったといえる。
協 力 団 体	相模原市中央区役所
	

事 業 名	相模原市立図書館ボランティア
日 時	2024 年 5 月 23 日（木）～ 2025 年 3 月 14 日（金）
場 所	相模原市立図書館
参 加 人 数	17 名
内 容	相模原キャンパスの最寄り駅である淵野辺駅からほど近い場所に位置する相模原市立図書館で、学生が主体となって図書館に関する活動を企画・実施する活動を行った。この活動を通して、市民性を育む社会教育の機能を担う地域図書館について、ボランティア活動を通じて学生の理解を深めることを狙いとした。 プロジェクト内に①イベント係、②制作係、③読書係の 3 チームを構成し、各係メンバーがそのテーマに合わせた活動を企画・実施した。年度始めと年度終わりに各 1 回プロジェクトメンバー全体でミーティング、また毎月 1 回、係ごとにプロジェクトミーティングを行い、企画の準備等を進めた。 ＜イベント係＞ 2024 年 11 月 10 日（日）、相模原市立図書館開館 50 周年を記念したスペシャルおはなし会のイベントの一つとして「学生ボランティアによるおはなし会」を実施した。就学前の近隣地域の子ども達を対象とし、英語での読み聞かせも取り入れながら、子どもたちを楽しんでもらえる読み聞かせを目標に企画・実施した。

内 容	〈制作係〉 制作係では、相模原市立図書館開館 50 周年記念冊子の制作を行うこととし、冊子のレイアウト案や内容についての検討を進めた。複数のアイデアを基に執筆、編集担当を決め、2024 年 10 月 2 日（水）には相模原市中央区役所を訪問し区長と対談を行った。2025 年 1 月に記念冊子を発行し、完成した冊子は市内図書館や市内大学図書館に送付した。 〈読書係〉 相模原市立図書館開館 50 周年記念イベント「コント&ビブリオバトル～究極のアオハル本を君に捧ぐ～」を、2024 年 11 月 10 日（日）に実施した。イベント周知ポスター、進行シナリオ作成、バトラー等、複数の役割を分担し進めた。バトラー参加者は、読書係メンバーだけでなく、相模原市ゆかりのメンバー含む「青色 1 号」及び相模女子大学司書課程の有志学生も加わった。
成 果	本企画は今年度から始まった新しい取り組みであり、参加した学生たちは活動に積極的に取り組み、また共通のビジョンを持ちながら活動することができた。開館 50 周年の年でもあったため、複数の記念イベントや制作物を企画することができた。 この活動を通じて、学生たちは地域の図書館が持つ社会教育機能や意義への理解を深めるとともに、地域社会とのつながりも学ぶことができた。
協 力 団 体	相模原市立図書館



(イベント係：おはなし会)



(読書係：ビブリオバトル)



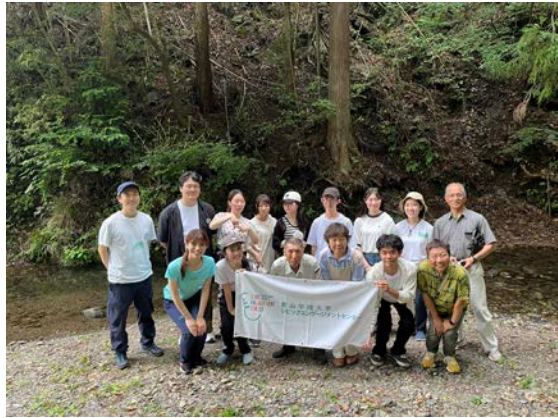
(制作係：開館 50 周年記念冊子)



事業名	相武台団地活性化プロジェクト
日時	① 2024年5月27日(月)～2024年12月20日(金) 事業所での活動、各行事へ参加 ② 2024年6月～11月 毎月第4水曜 オンラインミーティング ③ 2024年11月13日(水) 18:30～20:00 認知症サポーター養成講座に参加 ④ 2024年11月29日(金) 12:50～14:50 相模原市立共和中学校にて福祉体験学習に講師として登壇 ⑤ 2025年1月28日(火) 16:30～18:00 活動報告会
場所	認知症対応型デイサービス「おとなり」(相武台団地商店街) / オンライン / 相模原キャンパス / 相模原市立共和中学校
参加人数	7名
内容	相武台団地商店街にある認知症対応型デイサービス「おとなり」を拠点に、高齢者福祉や地域づくりへの理解を深めながら、相武台団地の活性化に取り組んだ。学生は週1回程度「おとなり」で活動するとともに、商店街で開催される季節行事に参加した。活動終盤には学生それぞれが個人企画を立案・実施し、ご利用者様や地域の方々と交流する新たなきっかけづくりを行った。また、活動への理解を深めるために認知症サポーター養成講座を受講したほか、活動成果の還元として共和中学校で実施された福祉体験講座に講師として協力した。
成果	最終年度となった2024年度は、これまで参加してきた学生たちが築いてきた活動基盤の上に、継続学生によるマネジメントと新規学生の意欲がうまくかみ合い、大きなトラブルもなく円滑に活動を進めることができた。その成果は、センター関係者からの評価の高さにも表れており、学生の記録(エピソードをまとめたレポートや写真など)をもとに、活動内容を紹介する冊子を急遽作成することとなったことから裏付けられる。 2021年にコロナ禍で手探りの中スタートした本プロジェクトは、年度を重ねるごとに試行錯誤を繰り返しながら前進してきた。その過程において方向性を見失わずに活動を継続できたのは、受入先の方々が学生たちの可能性を信じ、根気強く見守り支えてくださったからこそである。
協力団体	認知症対応型デイサービス「おとなり」




事業名	青山学院大学×ケントクワイナリー×相模原市中央区役所コラボ企画
日時	2024年6月13日(木)～2025年3月8日(土)
場所	ケントクワイナリー(農場・醸造所)、さがみはらアンテナショップ sagamix 等
参加人数	11名
内容	本企画は、ブドウの栽培から醸造まで、ワイン造りの工程を全て市内で行われた相模原産のワイン、「相模原ワイン」を地域の新たな特産品として広くPRし、中央区をはじめとする相模原地域の活性化や魅力向上に貢献することを目的としたものである。2023年度の「わかば」プロジェクト自由企画チームによる活動(オリジナルラベル制作、PR動画の作成、農場作業体験等)から発展し、2024年度は独立したボランティア・プログラムとして展開した。 「わかば」プロジェクトでは活動の性質上、企画段階に多くの時間を要し、実質的な活動開始が夏頃にずれ込む傾向がある。そこで本企画では、前期の6月から農場作業に参加し、早期から実践的な活動を行うことで、ワイン造りの工程に対する理解を深めながら、PRに向けた企画立案を進めた。 6月から9月にかけては農場にて除葉、摘房、房落とし、収穫、除梗破碎といった各種作業を体験し、7月から1月にかけては醸造所での瓶詰めやラベル貼りなどの作業にも参加しながら、相模原ワインの魅力を伝えるPRの方向性について議論と検討を重ねた。 その結果、PR活動として、コラボワインのオリジナルラベルの制作、生産者および学生へのインタビュー動画の作成、地域のコミュニティ放送FM HOT 839(エフエムさがみ)へのラジオ出演等を行い、また活動の集大成として2025年3月8日には、相模原市のアンテナショップ「sagamix」にて試飲販売会を実施した。
成果	本企画を通じて、参加した学生たちは相模原地域の気候・風土や地域性といったものに対する理解を深めることができた。また、実際に農場や醸造所での作業を経験する中で、ワイン造りに携わる生産者のこだわりや日々の苦労を肌で感じるとともに、農業やものづくりの現場に対する理解も深まったといえる。 さらに、地域の特産品として「相模原ワイン」を広めるために尽力する行政職員の姿を間近で見る機会を得たことで、地域振興における行政の役割や、その仕事の意義についても学ぶことができた。学生たちにとって、自らの企画が実際に地域の人々とつながり、販売や発信という形で社会に届いていく過程は、非常に貴重な経験となったのではないだろうか。 本企画は、ワイン造りや商品企画・PRといった視点から学生にアプローチするものであり、これまで「ボランティア」や「地域貢献」といった動機で参加していた学生層とは異なる、新たな層の学生を取り込むことを意図した。その目的は一定程度達成され、幅広い関心を持つ学生の参加を得ることができた。
協力団体	相模原市 中央区役所 地域振興課 ケントクワイナリー(大森産業株式会社)
   	

事業名	藤野プロジェクト
日時	① 2024年7月20日（土）～2025年4月27日（日）しのばら園芸市ボランティア ② 2024年7月6日（土）9：30～16：00 藤野里山体験ツアー ③ 2024年9月19日（木）15：00～16：00 オンラインミーティング ④ 2024年11月29日（金）12：50～14：50 相模原市立共和中学校にて福祉体験学習に講師として登壇 ⑤ 2025年2月15日（土）13：30～16：30 さがみはら生物多様性シンポジウムにて活動事例発表団体として登壇
場所	相模原市緑区藤野地域 篠原地区 / 佐野川地区 / オンライン / 相模原市立共和中学校 / 相模原教育会館
参加人数	① 9名 ② 10名 ③ 4名 ④ 1名 ⑤ 2名
内容	“芸術のまち” “都心に一番近い里山” などの名前で知られる相模原市緑区・藤野地域をフィールドに、地域のことを知りながら、青学生の地域に根ざした社会貢献のあり方を考えていくプロジェクト。 しのばら園芸市活動ボランティアでは、地域の自然素材を使って「在るものを活かす暮らし」（＝持続可能な地域と暮らし）を提案する園芸市が篠原地区移住者を中心に立ち上がり、学生たちはその準備や当日の会場運営などに関わった。 里山体験ツアーでは、藤野に暮らす人たちと交流しながら、自然に触れ、地域の魅力を感じる一日を過ごした。午前は受入宅で竹を使って食器をつくったり、地域の伝統料理と一緒に作ったりしながら会話を楽しみ、午後は佐野川エリア周辺を散策しながら、自生植物の特徴や害獣の生態を学んだり、お茶畑や神社を訪れて地域住民の営みについて理解を深めた。
成果	しのばら園芸市ボランティアは、プロジェクトの柱となる活動のひとつで、通常は月1回程度の頻度で実施しているが、4月は園芸市の開催準備のため複数回の活動を行った。当日は会場設営や駐車場での誘導補助、本部や第二会場での運営補助など、学生に様々な役割が与えられ、実行委員の手が足りない場面での活躍に対して感謝の言葉をいただいた。コーディネーターが主導する段階を越え、学生メンバーの主体性によってプロジェクトが動いていると感じられる場面も多く、活動の成熟を実感している。一方で、学生による自主企画（出店など）は今回実現できなかったため、次年度はその実現に向けた支援を強化していきたい。 また、2021年度から継続している里山体験ツアーは4年目となり、藤野地域への関心を高める導入企画として定着してきた。今年度の参加学生の中からも、しのばら園芸市ボランティアへの参加を希望する声があり、プロジェクト全体の導入口としても十分な役割を果たしていると言える。
協力団体	しのばら園芸市実行委員会、藤野観光協会
 	

事業名	相模原市立小学校連合運動会ボランティア（相模原地域小中学校等連携事業）
日時	2024年10月1日（火）～4日（金）9：00～15：30
場所	相模原ギオンスタジアム
参加人数	9名〔10/1：1名、10/2：4名、10/3：3名、10/4：3名（延べ11名）〕
内 容	学生たちに地域の子どもたちと関わるボランティアの機会として、相模原市立小学校連合運動会（相模原市内の全ての市立小学校6年生及び義務教育学校6年生が出場）の運営ボランティアを行った。相模原市における教育の取り組みの一つである連合運動会を通して地域への理解を深めること、また子どもたちとの交流を通して大学生が子どもと関わることの意義などを感じてもらうとともに、子どもたちや学外の大人である小学校の先生方と接する中での学生たちの成長を期待し、連携企画として実施した。 相模原市立小学校連合運動会側としては地域の一員である大学生とのつながりを通して、子どもたちへの教育効果を期待し、また「人（財）が宝」をモットーとする相模原市の教育に関心と理解を持ってほしいという思いから、学生たちのボランティアを受け入れていただいた。 当日は競技の運営補助（走り幅跳びの砂ならし、走り高跳びのバーの補助、各種競技の道具の片づけ等）や児童招集時の誘導など、子どもたちの競技に近い場面でのボランティアを行った。
成 果	昨年度に引き続き、2回目のボランティア企画として相模原市立小学校連合運動会の活動に学生たちを参加させていただいた。この連合運動会は市内の市立小学校6年生及び義務教育学校6年生全員が集まる大規模な体育行事であり、各校の子どもたちがそれぞれの学校で練習してきた成果を出し合って他校と競技する姿は、参加した学生たちにとって、心の動くものであったようである。子どもたちにとって地域でのこうした経験が、自らの生まれ育った地へのシビックプライドの醸成に繋がっていくということも感じられたと史料する。また、当日は他大学の学生たちもボランティアとして参加しており、日々小学校教員などを目指して学び、子どもたちとも接している他大学の学生たちの姿を見ることで、本学の学生にとっても刺激となったのではないだろうか。
協力団体	相模原市立小学校体育的行事実行委員会



事業名	青学国際子ども食堂
日時	2024年10月17日（木）、11月21日（木）、12月19日（木）、2025年2月22日（土）
場所	大野北公民館
参加人数	小学生定員10名、調理担当留学生計4名、相模原市国際交流ラウンジ職員1名、コミュニティ人間科学部の学生12名
内容	外国の料理を体験する異文化体験と食育、さらに青山学院大学の学生との交流を目的として、大野北小学校の児童を招待して、2024年度後期から大野北公民館で月に1回ほどのペースで青学国際子ども食堂を開催した。海外の料理は青山学院大学の留学生、外国籍の学生、さらに相模原市国際交流ラウンジの外国人職員の方に作って頂いた。コミュニティ人間科学部の学生12名もこの活動に参加し、調理のサポートや子どもたちとの交流を行った。2024年10月は上海料理、11月はマレーシア料理、12月はブラジル料理、2025年2月はペルー料理を提供した。10月、11月、12月の3回については学生だけで事前にトライアルの食事会も行った。
成果	2024年10月の第1回青学国際子ども食堂開催にあたり、相模原市社会福祉協議会に紹介して頂いた大野北小学校の副校長先生に募集のチラシをお渡ししてこの子ども食堂の趣旨や目的についてご説明し、参加する児童の募集をお願いした。初回ということもあって参加した小学生は4名にとどまったが、ビンゴゲームなどをして楽しい時間を過ごすことができた。第2回からは募集対象を小学校3年生から6年生の4学年に広げたこともあって参加人数は8名に増えた。第2回の子ども食堂では地球社会共生学部のマレーシア人留学生3名にマレーシア料理を提供してもらったが、同学部のタイ人留学生も加わって賑やかな会合となった。12月の子ども食堂はコミュニティ人間科学部のブラジル国籍の学生がブラジル料理を提供してくれたが、残念ながらインフルエンザによる学級閉鎖などもあって参加者は2名だけとなった。2025年2月の子ども食堂は土曜日に開催し、相模原市国際交流ラウンジのロザマリアさんにペルー料理を提供して頂いた。また食前にロザマリアさんに料理の内容や母国ペルーについて日本語で簡単に解説して頂いた。 参加した子どもたちは毎回初めて食べる外国の料理に興味深そうに口にしていた。また青山学院の大学生とゲームをしたり、話したり、遊んだりして、大学生との交流も楽しんでいる様子だった。保護者から感謝のメールを頂くこともあり、リピーターとなる児童も数名いた。本学の学生も外国料理の調理や小学生との交流など、普段できない体験をすることができた。参加した大野北小学校の児童と青山学院大学の学生・留学生の双方に楽しく有意義な活動の場を提供できたのではないと思う。



イベント

事業名	ボランティアオリエンテーション
日時	2024年4月2日(火)・3日(水) 12:40～13:10 (相模原) 2024年4月4日(木)・5日(金) 12:40～13:10 (青山)
場所	各キャンパス シビックエンゲージメントセンター内
参加人数	(青山) 計32名、4/4:18名、4/5:14名 学部内訳: 不明 学年内訳: 1年(30)、2年(1)、3年(1) (相模原) 計25名、4/2:21名、4/3:4名 学部内訳: 地球(9)、社情(7)、コミュ(5)、理工(4) 学年内訳: 1年(22)、2年(2)、3年(1) 参考: 昨年度 青山計25名、相模原計13名参加
内容	新入生や春から新たにボランティア活動を始めたいと考える在学生などに向けてボランティアオリエンテーションを対面形式で実施した。 コンテンツは①ボランティアについて、②センター紹介、③参加方法、④プログラム紹介、⑤サービス・ラーニング科目の紹介等、例年と同様ではあったが、センターの場所や雰囲気を知ってもらう機会にもする目的で、センター内での対面形式とした。
成果	新年度開始直後の日程ではあったが、昨年度よりも多くの参加者を得ることができ、センターの存在やボランティア活動、サービス・ラーニング科目について周知することができた。 青山キャンパスでは新任コーディネーターが、相模原キャンパスでは学生スタッフがそれぞれ説明の中心部分を担い、説明を担当した者たちにとっても CEC の事業を理解する機会となったといえる。 なお、学生スタッフからの活動報告として、本書 68 ページにも報告記事を掲載している。
実施風景	(青山キャンパス)  (相模原キャンパス) 

事業名	ボランティアカフェ（ボラカフェ）		
内 容	ボランティアや社会貢献に興味がある学生向けに、実際に社会課題に取り組む団体や個人をお招きしてその体験等を語っていただくイベント。毎回様々なテーマでゲストスピーカーにお話しいただきました。		
開催日	テーマ	ゲストスピーカー	参加者数
① 2024年5月22日(水)	貧困って何だろう？～フィリピンに行って考えたこと～	竹之内愛梨氏 (国際政治経済学部 1 年) 中島柚香 (法学部 1 年)	35 名
② 2024年5月23日(木)	能登半島地震での災害ボランティア活動報告	遠山明日香氏 (国際政治経済学部 2 年) 湯原和憲氏 (国際政治経済学部 2 年) 宮崎寛之氏 (国際政治経済学部 1 年) 荒井友輔氏 (経済 1 年) 小鮎巧実氏 (コミュニティ人間科学部 3 年) 戸田うい氏 (コミュニティ人間科学部 2 年)	4 名
③ 2024年11月6日(水)	生成 AI って何？～ Chat-GPT の世界を知る～	鳥居郷一 氏 (ソフトバンク株式会社 CSR 本部)	4 名
④ 2024年12月20日(金)	入管面会の現場から～希望を繋ぐにはどうすればいいのか？～	国際政治経済学部 3 年生有志	1 名

①		ボラカフェ第 1 回：貧困って何だろう？ - フィリピンに行って考えたこと -
日 時	2024 年 5 月 22 日 (水) 12:40 ～ 13:10	
場 所	青山キャンパスシビックエンゲージメントセンター内	
参 加 人 数	35 名	
内 容	青山学院高等部出身の 1 年生 2 名が、大学入学前の春休みに、高等部の生徒として青山学院フィリピン訪問プログラムに参加した時の経験を、今後の活動に繋げたいという相談を受け、本企画・開催に至った。 企画した学生たちが、現地訪問プログラムに参加して体験したこと考えたことについて写真や動画を交えながら共有し、今後取り組みたいと考えていること等について語った。	
成 果	実際に現地でいくつかの地域を訪れ、現地の人たちとの交流する中で、「貧困とは何か？」「豊かさとは何か？」そして「自分たちにできることは何か？」など考えた多くのことについて、参加者と共有する機会を提供することができた。 フィリピン訪問プログラムは初等部から高等部までの生徒が関わっているため、当日は、初等部・中等部・高等部各校の生徒および教職員の参加もあり、青山学院の一貫教育の良さを感じられるものとなった。 また、スピーカーとなった 2 名の学生は、その後団体を設立して新たな活動も展開しており、今後は AOGAKU ボランティアネットワークの登録団体としても支援していきたいと思う。	



ポラカフェ「貧困って何だろう？」

@1号館1階 シビックエンゲージメントセンター

公益財団法人AOGAKU（公益財団法人）が主催するボランティア活動の場です。フィリピン訪問プログラムに参加した学生が、現地での体験を共有し、今後の活動について話し合います。

ポラカフェとは？

ポラカフェとは、ボランティア活動の場です。フィリピン訪問プログラムに参加した学生が、現地での体験を共有し、今後の活動について話し合います。

②	ボラカフェ第2回：能登半島地震での災害ボランティア活動報告	
日時	2024年5月23日(月) 17:00～18:30	
場所	オンライン	
参加人数	4名	
内容	2024年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」に災害ボランティアとして能登町で活動した本学の学生6名に協力いただき、NPO法人パルシックのもとで実施した支援内容を報告してもらった。また、それぞれが現地で活動するなかで印象深く残っている出来事について、写真を共有しながら語ってもらった。	
成果	協力いただいた6名は、現地へ行く大学生が限られていた3月に活動し、現地で得た情報や自身の思いを広く学生に届けたいという気持ちを持っていたので、その思いに応えられる場としてボラカフェを開催できたことは、成果の一つとなった。一方で、参加者が少なかったことは今後の課題と言える。また、登壇する学生が複数いたことから、一人あたりの発表時間を3～5分に設定し、全員が公平に発信できるよう配慮した。	
協力者	荒井友輔さん(経済1年)、小鮒巧実さん(コミュ3年)、遠山明日香さん(国政経2年)、戸田ういさん(コミュ2年)、宮崎寛之さん(国政経1年)、湯原和憲さん(国政経2年)	
		

③	ボラカフェ第3回：生成AIって何？～ChatGPTの世界を知る～	
日時	2024年11月6日(水) 17:00～18:30	
場所	相模原キャンパス F305 教室	
内容	11月6日のボラカフェでは、ソフトバンク株式会社 CSR 本部の鳥居郷一さんをゲストスピーカーとしてお招きし、「生成AIって何？～ChatGPTの世界を知る～」というテーマでChatGPTやMicrosoft 365 Copilotをはじめとした生成AIの基礎知識についてお話しいただいた。	
成果	生成AIの使い方や注意点だけでなく、その歴史や回答生成の仕組みについても説明いただいた。また、実際に参加者たちもChatGPTを操作しながら生成AIの活用方法について体験的に学ぶことができた。メールの書き方や情報整理の方法等、学生がボランティア・地域活動をする際、もしくはその発表をする際も含め実践的に活用できる知識を学ぶことができたといえる。従来のボラカフェとは趣を異にしたテーマであったが、その分普段シビックエンゲージメントセンターの企画に参加することがない学生の参加にもつながる機会となったといえる。質疑応答の際には多くの質問が学生から出され、この分野に対する学生の関心の高さがうかがえた。	



④	ボラカフェ第4回：入管面会の現場から－希望を繋ぐにはどうすればいいのか？－
日 時	2024年12月20日(金) 12:40～13:10
場 所	青山キャンパスシビックエンゲージメントセンター内
参加人数	1名
内 容	2023年度のスタートアップコースに採択され、難民映画の自主上映会を実施した学生が、同じ分野に関心を持つ学生を募り、さらなる活動展開に繋がりたいということから本企画を開催するに至った。 当日は、入管面会や、川口の日本語教室をはじめとするボランティア活動を通して経験してきたことや課題と感じていること等について話し、参加者と意見を共有した。日頃の活動現場において、多様な人たちと関わっている中で、時には無力さを感じながらも、「自分たち学生が活動を行なうことの意義」などについて話し合った。
成 果	参加者が少ないのは残念であったが、心理学、国際協力分野のいずれにも関心のある学生が参加し、限られた時間の中で、気になることを丁寧に共有できた点はよかった。参加した学生も、「生きる意味がない」と感じる方に対して、どのように寄り添い、希望を見出す手助けができるのかを深く考えさせられ、入管面接の場に立ち会ってみたいという関心が強まったと話しており、このような活動に関心のある学生同士が体験を共有する機会を今後も増やしていければと思う。



事業名	CEC 学生スタッフ企画「衣服から日常をより良く」
日時	2025 年 1 月 8 日 (水) 13:20 ~ 15:20
場所	青山キャンパス 17 号館 17506 教室
参加人数	青学生 6 名、他大・一般 7 名、ゲスト 1 名、CEC 学生スタッフ 5 名
内 容	2024 年 10 月よりパタゴニア東京・渋谷ストアの協力を得て、CEC 青山学生スタッフ企業コラボチーム 5 名がコラボ企画の実施に向けてミーティングを重ねてきた。社会問題への関心をまだ持っていない青学生が気軽に参加でき、インプットに終わらないイベントを実施することを考え、「日常をより良く」というキャッチフレーズで連続のイベントシリーズを企画している。第 1 回目となる 1/8 は「衣服」をテーマに、ファストファッションやアパレル産業の問題について学び、学生としてできることについて考える機会を設けた。 (ポスター作りから当日の運営まで基本的に学生たちが自主的に行っている。) <u>イベント名</u> 「CEC 学生スタッフ企画：青学生×環境問題×“ファッション” = ? 『思い出の T シャツでオリジナルエコバックを作ろう』」 <u>コンテンツ</u> ・パタゴニアフィルムズの映像上映 ・パタゴニア東京・渋谷ストア ストアマネージャー成田直隆さんのお話 ・参加者同士のディスカッション ・T シャツからエコバックを作るワークショップ
成 果	告知時期が年末年始に重なり、十分な広報活動ができなかったが、渋谷ストアでアルバイトをしている学生も多数参加し、イベントとしては十分な参加数となった。イベントは終始和気あいあいとしつつ、意見が活発に飛び交う雰囲気、ワークショップももりあがった。実施後のアンケートには全員の回答があり、とくに満足度について全員が 5 段階評価で「5」を選んでいた。
協力団体	パタゴニア東京・渋谷ストア



事業名	2024年度青山学院大学シビックエンゲージメントセンター活動報告会
日時	2025年3月13日(木) 12:30～16:30 ※翌14日(金)ポスター展示
場所	青山キャンパス 10号館 1階 学生ラウンジ
参加人数	51名(参加者18名、発表者25名、運営8名)
内容	2024年度にセンター主催プログラムやボラサポ制度、サービス・ラーニング科目等を通じて社会貢献活動に携わった学生・教職員による成果報告会を実施した。主な内容は次の通り。 ・Coffee Time：アドバイザー・グループ「珈琲を知り、つながりを広げ、深める」活動協力団体logueによるドリップコーヒー提供および発表 ＜ボランティア・社会貢献プロジェクトサポート制度＞ ・スタートアップ採択案件：古民家カフェ「六つ季の家」認知度向上プロジェクト ・ステップアップ採択案件： ①あらとう青山祭 2024（あらとう～innovation around 20～） ②Painting AKABEKO in Taipei by MF3.11 Lab（MF3.11 東北応援愛好会） ＜CEC学生スタッフおよび地域プロジェクトに関する活動＞ ・青山キャンパス学生スタッフ「笹塚プロジェクトチーム」、「企業コラボチーム」 ・相模原キャンパス学生スタッフ、市民協働プロジェクト「相武台団地活性化プロジェクト」 ・AOGAKU ネットワーク所属団体の活動：相模原キャンパス / ゆめどこ ・自ら立ち上げる新しい活動 / 青山キャンパス学生 ・正課での活動と学び（サービス・ラーニング科目） ・教職員の社会貢献活動 能登半島災害ボランティア
成果	2024年度は、アドバイザー・グループの活動や教職員ボランティア活動補助プログラム制度を申請された教職員の活動報告も加わり、学内外の方々に様々な取り組みについて知っていただく機会となった。発表した学生からは、成果や課題を含めて活動を振り返るよい機会となったという声、また、青山・相模原両キャンパスの学生同士が対面で知り合う機会ができたのはよかったという声もあった。 青山学院および他大学の教職員の方々の参加もあり、今後、学内外の方々との新たな取り組みの展開を考えていくための良いきっかけとなった。
 	

講座・セミナー

事業名	シビックエンゲージメントはじめの一歩
日時	2024年6月21日(金) 13:00～14:00、17:00～18:00
場所	シビックエンゲージメントセンター青山キャンパス
参加人数	10名
内容	シビックエンゲージメントをテーマに入門的な講座を新たに企画、実施した。前半で「シビックエンゲージメントとは何か」、「青学生としてどのようなシビックエンゲージメントがあるか」について基本的な説明をしたあと、後半では実践への導入を意図したワークを行った。合わせて、6月28日まで募集を行っている青山学生スタッフの説明も行った。
成果	同内容で2回実施し、参加者は10名となった(第1部:7名、第2部:3名)。講座の後半では、コミュニティでの取り組みを実際に考えてみるワークを行い、参加者を青学チームに見立てて議論をしてもらった。初対面ながら各自が積極性を発揮し、実践的な雰囲気を楽しめている様子だった。 なお参加した10名のうち、その後7名が学生スタッフの募集に応募し、その後実際に学生スタッフとして活動を行っている。
 	

事業名	青山シビックエンゲージメントフォーラム
日時	2024年10月28日(土)、2024年11月30日(土)(ともに13:30～15:30)
場所	青山キャンパス短大N校舎202教室
参加人数	第1回 19名(学生・院生15名、一般4名) 第2回 33名(学生・院生25名、一般8名)
内容	学内外に向けた「シビックエンゲージメント」の啓発と、本学におけるシビックエンゲージメント活動の紹介を目的として、今年度より「青山シビックエンゲージメントフォーラム」を開催することとなった。各回では、ゲストによる基調講演、質疑応答に加えて、CECや学生ボランティアネットワーク加盟団体の活動紹介を行うとともに、参加者の相互交流を図った。 第1回 ゲスト 鍋本孝昭さん(那須まちづくり株式会社) 講演 「那須まちづくり広場の取り組む社会活動」 活動紹介 シビックエンゲージメントセンター学生スタッフ(映像) 第2回 ゲスト 露木しいなさん(環境活動家) 講演 「気候変動について想いを届ける」 活動紹介 あらとう～INNOVATION AROUND 20～ 国際政治経済学部学生団体 SANDS

成果

今年度から CEC の新しい取り組みとして「青山シビックエンゲージメントフォーラム」を年度内に 2 度開催した。サービス付き高齢者向け住宅をまちづくりにつなげて取り組んでいる那須まちづくり広場の取り組みと、環境教育を受けたことをきっかけに大学生ながら注目を集める若手環境活動家の取り組みと、好対照なゲストをお招きすることができた。また、新しい形として注目されている会場となった旧短大校舎の教室は雰囲気がよく、決して参加者が大人数ではないことがむしろアットホームな空間づくりにつながったと思われる。両回とも、ゲストとフロア（参加者）とのコミュニケーションも非常に活発であった。第 2 回については、ABS 授業「シビックエンゲージメントプロジェクト」受講生の企画を引き継ぐ形で実施し、フォーラムの準備から実施まで ABS 卒業生のチームに積極的に関わってもらい実施した。

第 1 回



第 2 回



事業名	2024 年度国際協力プランナー入門
日時	2024 年 11 月 16 日（土）・17 日（日）10:00 ～ 17:00
場所	青山学院大学 14 号館（総研ビル）11 階 第 19 会議室
参加人数	計 9 名（申込者 10 名）
内容	2019 年度から実施している国際協力プロジェクトを企画するための座学と実践的ワークショップを組み合わせた 2 日間の研修を実施した。内容は SDGs の導入講義に始まり、国際協力を担う関係者（アクター）やロジックモデルを用いたプロジェクトマネジメントの枠組みを学びながら、チームごとに企画会議を行い、最後にアクションプランを完成させるというものである。「持続可能な開発と国際協力」の講義に続き、エシカルなビジネス「ネパールでの持続可能なコーヒプロジェクト」、NGO の国際協力「カンボジアでの誰も取り残さない教室」、JICA のプロジェクト「みんなの学校」、外国出身者に聞く現地社会と国際協力「ブルキナファソの社会と現地の人々にとっての国際協力」について、それぞれのゲストスピーカーにご講話いただいた。予定したカリキュラムを修了した 9 名の学生には修了証を発行した。

成 果	昨年度までの課題を踏まえ、今年度は開催時期及びプログラムの全体構成を変更して、1日目に講義（インプット）、2日目にプロジェクト企画会議のワークショップを行った。企画会議では、実際に行われた教育分野のプロジェクト（サブサハラ・アフリカ地域の農村部の教育問題）を事例とし、実際のフィールドを知らない学生にとっても分析しやすく作成していただいた。 また、事前学習（参加者の負担とならないレベル）として、ゲストスピーカーの所属組織の概要等を調べ、関心を持った点等を整理したことも、限られた時間内で学びを深めるために効果的であった。 参加人数の点ではまだ課題があるため、次年度以降も検討したい。
協 力 団 体	特定非営利活動法人 GLM インスティテュート
 	

事 業 名	日本理化学工業工場見学ツアー
日 時	2024年12月11日(水) 13:00～15:00
場 所	日本理化学工業川崎工場
参 加 人 数	学生8名、職員1名、教員3名
内 容	チョーク生産において国内の7割のシェアをもつトップ企業でありながら、社員うち7割が障害者雇用で働き「障がいのある社員とともに、日本一のチョーク工場に」というスローガンを実現している日本理化学工業の川崎工場の見学ツアーを実施した。
成 果	大山隆久社長から日本理化学工業の目指すところ、取り組み、そして製品について説明があったのち、大山社長の案内で、障害のある方々が活躍し、チョーク生産を支えている工場の現場を見学した。 訪問後は学生に対して参加後の振り返りを実施し、得られたものを確認するとともに今後、青学生としてどのようなことができるかについてアイデアを募った。
協 力	日本理化学工業
 	

事業名	CEC セミナー（勉強会） 総合的な学習 探求「シブヤ未来科」の実践から学ぶ 学校と企業の連携・チームティーチング：小学生が会社を作ってみたら！『環境にやさしいゴミ袋をデザインして売ってみたい』
日時	2024 年 12 月 14 日（土）13：30～16：00
場所	青山キャンパス 17 号館 17408 教室
内容	渋谷区立臨川小学校第 6 学年による「シブヤ未来科」の実践の様子を通して、教育機関と企業との連携のあり方や、学校と企業の双方の担当者の実感を共有し、地域社会との連携によって目指される学びの可能性を検討した。 パネリスト：臨川小学校校長、教諭、日本サニパック株式会社社長、社員 コメンテーター：唐木清志（筑波大学）
成果	首都圏各地の小学校関係者をはじめ、地域連携に取り組む市民活動団体関係者、行政職員、企業関係者らが参加した。登壇者の報告をふまえて、参加者同士が対話を行い、質疑応答や活発な意見交換が行われた。今回事例に取り上げた小学校での実践を見ることを通して、小中高大学教育において、地域社会連携に着手するのみならず、意義のある取り組みを支えるための仕組み形成や教職員の体制作りをいかに持続可能なものとして発展させていくことができるかという課題を共有した。 参加者のコメントから、今後の展開を考えていくヒントを得ることや、実践へのモチベーションを高めることに繋がった様子がうかがえた。
	

事業名	子どもの居場所パネル展示&相談会
日時	パネル展示：2024 年 6 月 13 日（木）～27 日（木） 相談会：2024 年 6 月 27 日（木）12：00～15：00
場所	相模原キャンパス シビックエンゲージメントセンター
参加人数	相談者 9 名（内教職員 1 名）
内容	学校外での子どもたちの居場所となる子ども食堂や無料学習支援等の活動について、相模原市内で活動している団体の様子や活動内容を紹介するパネル・マップの展示を行った。 展示期間中は学生が自由に閲覧できる状態とし、活動に興味を持った学生は直接団体に連絡ができるよう、各団体の連絡先等も掲示した。 また、パネル展示の最終日には相談会を実施し、相模原市社会福祉協議会の職員や中央ボランティアセンターの相談員の方（計 4 名）に学生や教職員が相談できる機会を設けていただいた。 この活動は相模原市社会福祉協議会の事業として実施し、シビックエンゲージメントセンターとしては展示・相談場所や什器の貸し出し、学内告知等の協力を行った。
成果	今年度は新たな試みとして、子どもの居場所パネル展示&相談会という形で実施した。 パネル展示はシビックエンゲージメントセンター前の掲示スペースを利用したが、この場所は学生のボランティア団体をはじめ日々多くの学生が利用している場所であるため、多くの学生の目に触れることができたといえる。 最終日の相談会には 8 名の学生が参加し、子どもの居場所づくりやボランティア活動について、熱心に話を聞いている様子であった。

主 催 団 体	主催：相模原市 実施：社会福祉法人相模原市社会福祉協議会
	

事 業 名	認知症サポーター養成講座
日 時	2024年11月13日(水) 18:30～20:00
場 所	相模原キャンパスF棟F305教室
参 加 人 数	9名(うち教職員1名)
内 容	認知症を正しく理解し知識を身に着けるための講座として、今年で5回目の開催となる。今年度は認定NPO法人Link・マネジメント代表理事の井戸和宏氏と相模原チームオレンジサポートセンターの清水静香氏を講師に迎え、認知症の基礎知識や認知症の歴史、相模原市の状況などについて講義をしていただき、追加トピックスとしてヤング・ケアラーについてもお話しいただいた。また、社会福祉協議会からも活動につながる情報等の紹介をしていただいた。なお、本講座は例年青山・相模原両キャンパスで開催しているが、今年度は青山キャンパスのコーディネーターが新しく着任したばかりということもあり、相模原キャンパスのみでの開催となった。
成 果	清水氏の講義は基本的な情報を伝えるだけでなく、学生との対話を通じて進める参加型のスタイルが特徴的で、さらに認知症の方の心理状態を体験できる仕掛けも取り入れられていた。また井戸氏のお話は日常的な経験を交えながら、参加者の表情や反応に応じてリアクションを取りつつ進行されたため、参加者にとってただ一方的に話を聞くだけでなく、より主体的に学ぶ機会となった。 当日は認知症対応型デイサービス「おとなり」で活動するシビックエンゲージメントセンターの市民協働プロジェクト「相武台団地活性化プロジェクト」のメンバーや、家族に認知症の方を持つ学生・教職員など、日頃から認知症の方と接する機会が多い参加者も多く、そうした参加者たちにとって、認知症について改めて理論的に学ぶ機会となった。
協 力 団 体	認定NPO法人Link・マネジメント、相模原チームオレンジサポートセンター、相模原市社会福祉協議会
共 催 団 体	全国キャラバンメイト連絡協議会



事業名	防災ボランティア講習：無線機を使ったコミュニケーションを体験しよう
日時	2024年12月17日（火）18：00～19：30
場所	F307 教室、F308 教室
参加人数	6名（学生4、教職員2）
内容	無線機（トランシーバー）が災害発生時の通信手段として有効であることを伝えた後に、受講者2名1組になって実機を用いたワークショップを行い、その特徴や使い方（機器操作、通話方法）などについて理解を深めた。後半では発熱材と水を用いて調理する防災食等を紹介し、実際に調理・試食して調理方法や味を確認した。また、無線機が活用されている災害現場や、能登半島（輪島市・能登町）避難所で提供されていた食料についても写真をもとに紹介した。
成果	学内の備品（相模原事務部庶務課）を活用し、より実践的かつ汎用性の高い講習ができた。また、災害発生時の学内対応については教職員があたることが想定されているが、（災害の内容によっては）学生の協力を仰ぎながら対応にあたることを考える上でも役立つ講習であったと思う。ワークショップ後には無線機を実際に使ってみた感想や意見交換が活発にされるなど、学生、教職員それぞれの立場で防災に対する理解を深める良い機会になった様子だった。
実施風景	 

各種サポート制度

青山学院大学シビックエンゲージメントセンターでは、青学生や教職員向けの活動を支援する様々な制度を設けています。

「災害・復興支援活動に対するサポート制度」

地震や台風、豪雨など大規模自然災害にかかる災害および復興支援ボランティア活動に参加する学生に対し、経済的負担を軽減することを目的に活動地までの旅費・宿泊費を補助する制度。2024年1月1日に発生した能登半島地震を受け、被災地支援ボランティアとして活動してきた学生7名に対し、本制度を適用した。

2024年度利用件数 7件

補助活動内容	活動日	件数
能登半島地震 被災地支援ボランティア (第一期) ※青山学院宗教センター主催	2024年8月20日～23日	4件
能登半島地震 被災地支援ボランティア (第二期) ※青山学院宗教センター主催	2024年9月5日～8日	3件

「教職員ボランティア活動補助プログラム」

教職員の自発的な社会活動への参加を促進するため、社会活動に参加した教職員に対し、条件を満たした場合、交通費の一部支給など、費用補助を行う。

2024年度利用件数 3件

補助活動内容	活動日	件数
能登半島地震 被災地支援ボランティア (第一期) ※青山学院宗教センター主催	2024年8月20日～23日	2件
能登半島地震 被災地支援ボランティア (第二期) ※青山学院宗教センター主催	2024年9月5日～8日	1件

「ボランティア・社会貢献プロジェクト・サポート制度（通称ボラサポ）」

青学生や教職員が主体となって実施するボランティア社会貢献プロジェクトを応援する助成制度として毎年度実施している。

コーディネーターによるサポートのもと新たに始めたいというプロジェクト向けのスタートアップコースと、これまでの活動をもとにさらに発展させたいプロジェクト向けのステップアップコースがあり、助成金額の上限は前者が5万円、後者が30万円となっている。また申請について、前者は2024年7月から2025年1月と長期間受け付けており、制度を活用しやすい環境を作っている。

2024年度の採択件数はスタートアップコースが2件（申請も2件）、ステップアップコースが2件だった。

2024年度採択プロジェクト

スタートアップコース 2件（申請件数 2件）

プロジェクト名	採択時期	助成金額
古民家カフェ「六つ季の家」認知度向上プロジェクト	2024年10月	34,600円
教育の未来を語ろう！プロジェクト	2025年2月	13,688円

ステップアップコース 2 件（申請件数 3 件）

プロジェクト名	助成金額
あらとっ 青山祭 2024	23,940 円
Painting AKABEKO in Taipei by MF3.11 Lab	253,104 円

【スタートアップコース】

事業名	古民家カフェ「六つ季の家」認知度向上プロジェクト
日時	2024 年 10 月 12 日（土）、13 日（日）
場所	古民家カフェ「六つ季の家」（新潟県南魚沼市 辻又集落）
内 容	古民家カフェ「六つ季の家」の認知度を向上させ、辻又地域の活性化につなげることを目的として、コミュニティ人間科学部の 1・2 年生有志が企画・実施した。 活動の具体的な内容は、六つ季の家の認知度向上のためのワークショップイベントとしてバーバリウム制作イベントを企画・実施し、それに合わせてオリジナルケーキとドリンクのセット販売を行うというものであった。また、告知の際にはチラシの配布だけでなくこの活動について地域の新聞社に取材を依頼し、広報につなげた。
成果・展望	参加者の中には既に六つ季の家を認知している方もいたが、チラシや新聞、人づてによりこの企画を知り、参加していただいた方もおり、六つ季の家の認知度向上にこのイベントが一定程度貢献できたといえる。また、イベント参加者同士の交流も見られ、六つ季の家が辻又集落のコミュニティの基点となる可能性を実感することができた。参加者からの反応も好評であり、1 日目に来た方が友人を連れて再度来店するなど、認知度向上やコミュニティづくりの成果が目に見える形であられた。 一方で、予約管理の方法や材料の適正配分等、課題も見えてきたため、次回のイベントでは改善を加え、より参加しやすく楽しんでもいただけるイベントとしていきたい。 今後も六つ季の家のイベントを継続し、認知度をさらに向上させることを目指すとともに、辻又集落や近隣地域のコミュニティづくりに貢献するため、引き続き努力していく。



事業名	「未来の教育を語ろう！」プロジェクト
日時	2025年2月12日(水)
場所	レンタルスペース(渋谷)
内容	東京でのミニミュンヘンの開催を目指す Stadt ミニミュンヘン愛好会の主催で、ミニミュンヘンの取り組みに関心をもつ子どもに関わる学生・社会人団体のつながりづくりを目的として、イベントを企画実施した。結果、5 団体が参加し、以下のタイムスケジュールで活動紹介や情報共有などを行う場になった。 ・ 14:30 ～ 14:40 受付 (10 分) ・ 14:40 ～ 14:55 始めの挨拶・アイスブレイク (15 分) ・ 14:55 ～ 15:05 龍雲寺てらこや様プレゼン (10 分) ・ 15:05 ～ 15:10 戸塚てらこや様持ち時間 (5 分) ・ 15:10 ～ 15:20 東海大学 GIP 様プレゼン時間 (10 分) ・ 15:20 ～ 15:35 はなまる学習会様説明 (15 分) ・ 15:35 ～ 15:45 Stadt ミニミュンヘン愛好会プレゼン (10 分) ・ 15:45 ～ 15:55 PLAY-WORK 実行委員会様プレゼン (10 分) ・ 15:55 ～ 16:20 雑談・交流 (25 分) ・ 16:20 ～ 16:30 アンケート (10 分)
成果・展望	当初目指していた 10 団体の参加はかなわなかったものの、参加者がリラックスして年齢関係なく交流できる雰囲気を感じてイベントを実施した。結果として、終了時のアンケートで「Stadt の活動に関心をもった」と回答してくれた団体が多く、その後、つながりの場として設けたオープンチャットに登録してくれた方々も多数いたことに手ごたえを感じた。今後のこどもを対象にしたイベントでは実際にこどもに関わる団体の協力を得ながら、こどもと一緒に遊んで自主性を伸ばす関わり方を探りながら活動していきたい。
	

【ステップアップコース】

事業名	あらとう青山祭 2024
日時	2024年11月1日(金)～11月3日(日)
場所	オンライン・青山学院大学青山キャンパス
内容	アパレル産業の課題を伝え、同世代の意識変容、行動変容を促す機会として 2024 年度青山祭で以下の企画実施を行った。 青祭 1 日目: ダンスショー (WAGEN さんコラボ)・ワークショップ (あずま袋づくり・刺繍リメイク)・古着回収・展示 青祭 2・3 日目: DJ ミュージック・ワークショップ (あずま袋づくり・刺繍リメイク)・古着回収・展示

成果・展望	イベント参加者からは、環境問題への関心が高まったという声が寄せられ、多くの人に環境配慮を意識した行動の重要性を伝えることができた。さらに、青山学院大学での開催により、学生間に留まらず、意識や行動がその周囲にも波及する可能性を感じた。また、活動を通じてメンバー自身も環境問題への理解を深め、企画の成功体験を通じて、ポジティブで身近な形で社会課題に取り組む意義を再認識できた。この経験を糧に、今後の活動にさらに力を入れていきたいと考えている。 今回の企画を通じて一定の意識変容を促すことができた一方で、より多くの人々にアプローチし、幅広い層に環境問題の重要性を届ける必要があると感じた。また、意識変容を具体的な行動変容につなげるための仕組みやフォローアップが課題として残された。今後は、団体の活動領域を拡大し、企業や外部団体とのコラボレーションを積極的に進めたい。そして、多様な視点を取り入れながら、より大規模で影響力のあるイベントを開催し、持続可能な社会実現への貢献を目指したい。
	

事業名	Painting AKABEKO in Taipei by MF3.11 Lab
日時	2024年4月6日(土)～11月30日(土) 台北でのワークショップ実施日：10月19日(土)
場所	日本台湾交流協会 文化ホール(台北) 他
内容	2024年4月、大地震に見舞われた台湾を応援するため、地元の小中学生を対象に、福島伝統民芸品「赤べこ」の絵付け体験ワークショップを開催した。ワークショップに加え、福島や東日本大震災、防災、東北の伝統工芸についてミニ講義を行い、震災から復興していく福島の現状と魅力を伝えた。 事前に東京でのワークショップを開催するとともに、会津町方伝承館や日本台湾交流協会、台湾大学台湾日本学生交流会に協力を依頼し、伝承館館長や台湾の大学生にもサポートいただきながら、現地でのワークショップを開催した。 また、本学の両キャンパス大学祭で台湾の飲料を販売し、売上総利益を台湾国立東華大学に全額寄付し、被災地台湾を支援した。
成果・展望	台北でのワークショップには22名の小中学生と20名の保護者の方々に参加いただき、イベントを通して福島の伝統工芸や復興が進む福島の「今」を伝えることができた。参加者アンケートでは9割以上の参加者から「福島や東北を訪れたい」とポジティブな感想をいただいた。 大学祭での台湾飲料販売では110,005円(台湾\$23,857)を台湾国立東華大学【0403 Earthquake NDHU Reconstruction Donation】に寄付することができた。 被災地台湾の支援と被災から復興しつつある福島の支援・PRの両方を実現することができ、台湾と福島の交流の一助となった。今後も伝統工芸を通して、国外に東北地方および日本の魅力を伝えていきたい。
	

「AOGAKU ボランティアネットワーク」

シビックエンゲージメントセンターでは 2020 年度から学生ボランティア団体と繋がり、団体の活動を促進させる目的で AOGAKU ボランティアネットワークを立ち上げています。

このネットワークには学友会組織に所属しない学生任意団体も参加することが可能であり、2024 年度は青山・相模原両キャンパスで 15 団体の登録がありました。

＜青山キャンパス＞

青山子ども会	あらとう ～ innovation around 20 ～
IES ボランティア愛好会（旧 STUDY FOR TWO ）青山学院大学支部	しぶっこ渋谷区こどもテーブルボランティア愛好会
学生団体 Youth for Ofunato	国際政治経済学部公認団体 SANDS
TsunAGU ボランティア愛好会	SHANTI SHANTI 国際ボランティア愛好会

＜青山キャンパス・相模原キャンパス＞

アイセック青山学院大学委員会	MF3.11 東北応援愛好会
----------------	----------------

＜相模原キャンパス＞

fan × fun 学生ボランティア愛好会	青山学院大学 SIVA ボランティア愛好会
ゆめどこ	Le Lien（ルリアン）ボランティア愛好会
明るい村づくりの会 青学支部	

＜2024 年度の主な実績＞

- ・4 月に、相模原キャンパスでは「学生ボランティア団体合同説明会」を、青山キャンパスでは「学生ボランティア団体活動紹介 WEEK」を開催
- ・ZoomPro アカウントの無償貸出（8 団体）
- ・外部助成金やセミナー情報の提供
- ・共同倉庫（部室）スペースの提供
- ・センターフリースペースの提供
- ・学生団体企画イベントの学内広報協力

青山スタンダード科目

正課での取り組み（青山スタンダード科目）

青山スタンダードで開講されている科目として、ボランティア活動やサービス・ラーニング等に関する授業の実施・協力を携わり、学生が地域社会への理解を深め、活動に参加することにつながる取り組みを行った。

【サービス・ラーニング科目】

■ サービス・ラーニングⅠ（青山キャンパス 前期）

サービス活動とは何かを学んだ上で、NPO 法人のゲストスピーカーの講義と活動への参加を通して、社会課題に取り組む現場への理解を深めた。今年度はアジア・アフリカから派遣された学生に農村指導者研修を行う団体、難民の住まいや暮らしを支援する施設を運営する団体、渋谷区で子ども食堂を実施する団体に協力をいただいた。

連携先

- ・学校法人アジア学院
- ・NPO 法人アルペなんみんセンター
- ・渋谷区こどもテーブル

■ サービス・ラーニングⅠ（青山キャンパス 後期）

「グローバル時代の社会課題」（外と内の両面から）をテーマにして、サービスの視座と姿勢を学ぶことを目的とし、国際協力団体として主に子どもたちを支援する2つの団体との連携のもと実施した。各団体のニーズにそって、海外の拠点（ネパール、カンボジア）とのコミュニケーションを重ね、教育支援とアドボカシーなどのサービス活動に取り組んだ。

連携先

- ・認定 NPO 法人 チャイルド・ファンド・ジャパン
- ・認定 NPO 法人 グローブジャングル

■ サービス・ラーニングⅡ（青山キャンパス 後期）

社会の課題をビジネスの手法で解決することを目指すソーシャルビジネス（社会的企業）をテーマに、ゲストスピーカーの講義と学外での活動を通して問題解決へのアプローチを学んだ。今年度は西アフリカで貧困層の女性の雇用を創出する企業、地域社会づくりに向けてタウンカフェなどを運営する企業、マイノリティの問題解決を目指す企業、国際交流シェアハウスを運営する企業、電子機器のリユース・リサイクル事業を子ども・難民支援につなげる企業に協力いただいた。

連携先

- ・ボーダレス・ブルキナファソ
- ・株式会社イータウン
- ・ゼネラルパートナーズ
- ・ボーダレスハウス
- ・ピープルポート

■ サービス・ラーニングⅢ（青山キャンパス 前期）

持続可能な社会に向けた学びと実践として、有機農業、食、多様性理解など履修生の関心テーマに基づいた調査活動を行い、夏期休暇中にアジア・アフリカからの農業指導者研修を行う、アジア学院にて3泊5日の実習を行った。

連携先

- ・学校法人アジア学院

■ サービス・ラーニングとしてのボランティア活動（青山キャンパス 前期）

外国につながる子どもたちへの学習支援の取組を通して日本社会における「多文化共生」の課題について理解を深めた。近年増加している多様なルーツや背景を持つ子どもやその家族が地域社会で暮らし、教育を受ける環境づくりを支えている2団体での実習を実施した。

連携先

- ・ NPO 法人 みんなのおうち
- ・ 社会福祉法人 さぼうと 21

【ボランティア・市民協働論】（青山・相模原キャンパス前期）

学生にとって身近に参加できるボランティア活動についての基本的理解をはじめ、青山学院と地域社会との連携の歴史、シビックエンゲージメントセンターでの活動やサービス・ラーニング科目について理解を深めた。ゲストスピーカーとシビックエンゲージメントセンターのコーディネーターが話題を提供し、幅広い切り口から社会理解を深めるための講義を実施した。

ゲストスピーカー協力者

- ・ 渋谷区インクルーシブシティセンター（アイリス）福吉晃平氏
- ・ 一般社団法人 藤野エリアマネジメント 高橋靖典氏
- ・ アサヒユウアス株式会社 宮野款氏
- ・ 上智大学名誉教授 田中治彦氏

【地方行政を通して相模原を知る】（相模原キャンパス 前期）

相模原市寄附講座として設置され、同市から派遣された職員が講師を務め、SDGs や観光、産業振興、歴史や自然など幅広いテーマが取り上げられた。相模原市の成り立ちや地域特性を踏まえつつ、行政の立場から都市の現状と課題、将来の展望について具体的に解説が行われた。受講生は身近な地域を多角的に理解するとともに、地域社会と大学の関わりを考える視点を養い、今後の市民協働プロジェクト等に取り組むための基盤を築くことができた。

アドバイザー・グループ（アドグル）

テ ー マ	珈琲を知り、つながりを広げ、深める
活 動 場 所	シビックエンゲージメントセンター（相模原キャンパス） 生活介護事業所 logue／ログ（山梨県上野原市）ほか
参 加 人 数	11 名（1 名は後期より参加）
内 容	「一杯の珈琲から広がる出会いと学び」をテーマに、三神アドバイザー・グループでは、山梨県上野原市の logue と連携しながら、カフェや福祉、地域、そして国際協力について多角的に考える活動が続いている。logue は、障害福祉サービスとカフェが一体となったユニークな場であり、学生たちはイベント運営やワークショップへの参加を通じて、カフェがもつ「居場所」としての機能や、地域におけるインクルーシブな関係づくりについて学びを深めてきた。 2024 年度の活動は、5 月のオンライン顔合わせに始まり、6 月にはドリップ式珈琲の淹れ方を体験した。夏から秋にかけては、カフェの仕事や地域でのつながりについて学ぶ会や、地産ガチャワークショップ、秋祭り、映画の自主上映会など、多様な活動に関わった。各回の活動後には、食事をともにしながら感想を語り合ったり、今後やってみたいことについて話し合うなど、気軽に思いを共有する時間も大切にしてきた。冬には、留学から帰国したメンバーとともに、上野原の名物・酒まんじゅうの調査や、山梨市で開催された e スポーツイベントに参加した。 学生たちにとって、カフェという空間を通して人と出会い、考えを深めるこの活動は、自分自身の関心や他者との関わり方を見つめ直す貴重な機会となっているようである。一杯の珈琲から広がったつながりが、それぞれの新たな挑戦へとつながっていくことを願っている。



学生スタッフの活動

事業名		学生スタッフによる SNS（Instagram）運用
日 時		2024 年 4 月～ 2025 年 3 月
内 容		このアカウントは、2023 年度から運用し始めた。青学生ヘシビックエンゲージメントセンターの存在や取組などの情報を発信・周知することを目的に Instagram を運用している。 アカウント：@ aoyama_cec 投稿数：20 件 フォロワー：270 人（2025 年 6 月 4 日時点）
成 果		投稿の間隔が空いていたため、定期的にイベント情報を発信するように心がけた。また、新体制となった青山キャンパスの学生スタッフに対して、インスタグラムの運用方針の共有を行った。2025 年度後半からは、青山キャンパスと相模原キャンパスの学生スタッフが連携し、共同で Instagram の運用を再開した。

< aogaku_cec ...



**青山学院大学シビックエンゲージメントセ
ンター学生スタッフ**

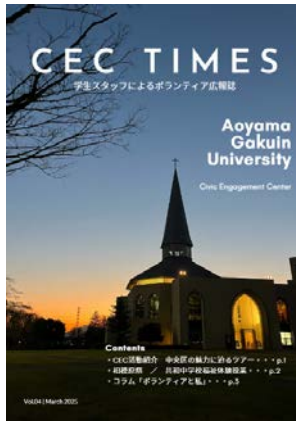
20	270	96
投稿	フォロワー	フォロー中

青山学院大学シビックエンゲージメントセンター(CEC) の
学生スタッフが運営する公式アカウントです！

-  [青学 CEC について](#)
-  [青学生ボランティア募集情報](#)

CEC への質問は DM にて 
▽ HP や詳細、申し込みはこちらから ▽
 volunteer-aoyamagakuin.jp、他 2 件



事業名	学生スタッフによるボランティア広報誌「CEC TIMES」
日時	CEC TIMES vol.3 発行 2024 年 10 月 CEC TIMES vol.4 発行 2025 年 3 月 CEC TIMES vol.5 発行 2025 年 4 月
内容	本企画は、シビックエンゲージメントセンター学生スタッフが、その活動目的の一つである「青学生のボランティア活動の啓発・発信」に基づき作成した広報誌であり、当センターの企画やセンターに関わる学生ボランティア活動について掲載している。学生たちの活動取材し発信することで、参加者の活動に対するモチベーションの維持・向上につなげること、またボランティア活動を経験したことのない学生に対して活動参加のハードルを下げることを企図した。さらに、学生スタッフ自身も、参加した活動の振り返りや自身の活動の歩みをたどるなど、広報誌作成を通して、経験や活動の言語化をする機会にもなった。今年度は計 3 回発行した。
成果	CEC TIMES vol.3では、シビックエンゲージメントセンター相模原キャンパスで実施されている三つの市民共同プロジェクトの一つである「藤野プロジェクト しのはら園芸市」について特集した。また、ボランティア活動を積極的に行っている学生にフォーカスしたインタビュー記事やシビックエンゲージメントセンター学生スタッフによるボランティア相談会に関する記事なども掲載した。 CEC TIMES vol.4では、「わかばプロジェクト」（相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト）の活動の一つ、中央区の魅力に迫るツアーについて、また青山学院大学相模原祭の教室展示の様子、シビックエンゲージメントセンター学生スタッフによる自身の活動の振り返りなどの内容で構成した。 CEC TIMES vol.5では、新年度新たに学生の目に留まる内容を意識して、センターの概要、正課科目での取り組み、また学生ボランティア団体（AOGAKUボランティアネットワーク）等を紹介する記事を掲載した。 CEC TIMESは、学内のあらゆる場所に設置させて頂けたことや大学祭で配布できたこともあり、多くの学生や地域の方々に手に取っていただくことができた。 （学生スタッフ所感） CEC TIMESを作成したことにより、シビックエンゲージメントセンターについて、学生たちのボランティア活動、その他センターで行われているボランティア活動などについて多くの人に周知できたと感じる。ボランティア活動を行っている学生も、経験したことがない学生も、どちらの学生に対しても効果的なものになったのではないだろうか。沢山の方々に手に取っていただき、嬉しい言葉をいただけた。
   CEC TIMES vol.3 CEC TIMES vol.4 CEC TIMES vol.5	

事業名	2024年度ボランティアオリエンテーション
日時	2024年4月2日(火)・3(水) 12時40分～13時10分
場所	相模原キャンパス シビックエンゲージメントセンター
参加人数	4月2日(木) 21名、4月3日(水) 4名 計25名
内容	2024年度入学者をはじめとして、2年生以上も対象に、相模原キャンパスに所属する学生に向けたボランティアオリエンテーションを4月2日(火)と4月3日(水)の12時40分～13時10分の2日間にわたり実施した。①ボランティアとは何か、②シビックエンゲージメントセンターの利用方法、③活動への参加の仕方、④学内ボランティアプログラム紹介、⑤青山スタンダード科目について、⑥CEC学生スタッフについて、スライドを使用しながら紹介した。全体でのオリエンテーション終了後には、個人の質問や相談を受ける時間を設け、多くの学生が参加した。
成果	4月2日は予想を超える多くの学生に参加いただいた。CECで行われているプロジェクトの紹介や、センターの利用方法はもちろん、ボランティアとは何かなど活動していくにあたって大切なことも伝えることができた。また、オリエンテーション後も学生一人ひとりの疑問や不安などの相談に丁寧に対応した。活動参加へのハードルを下げることができ、参加者の積極的な姿勢も見ることができた。 このオリエンテーションを通じて、私たち学生スタッフも改めてボランティアについて振り返り、CECの支援体制やプログラムについても理解を深め伝えることができた点は良かった。
	

事業名	学生スタッフによるボランティア活動相談会「春ボラトーク」
日時	2024年4月22日(月)～26日(金)
場所	相模原キャンパスシビックエンゲージメントセンター
参加人数	10人程度
内容	「春ボラトーク～CEC学生スタッフによるボランティア相談会～」と題して、4月22日から26日のお昼休みに実施した。このイベントは、CECのミッションの一つである「学生・教職員の自発的な社会貢献活動への参画を促進すること」に力を入れるため、CEC学生スタッフが企画を行った。対象は、ボランティアを始めたいと考えている学生だけでなく、自分に合った活動や団体が見つからない学生、あるいはボランティアに取り組む中で悩みや不安を感じている学生とし、そういった学生たちが気軽に相談できる場を作りたいという想いから企画したものである。
成果	本相談会には主に1・2年生の学生が参加し、「何から始めればよいかわからない」「自分に合った活動が見つからない」といった不安や悩みを抱える学生の姿が多く見受けられた。今回のイベントをきっかけに、初めてシビックエンゲージメントセンターを訪れる学生もあり、新たな一歩を踏み出す機会の提供につながった。 学生スタッフは相談会の実施に向けて、ボランティア・コーディネーションに関する基礎知識を事前に学習し、相談対応に臨んだ。その結果、よりの確で丁寧な支援が可能となった。また、参加者に適したボランティア活動を提案するため、「ボラマッチ」と題したマッチングマップを作成し、当日はその回答をもとに相談を行った。これにより、参加者の関心や志向を可視化しつつ、円滑かつ具体的なアドバイスを提供することができた。

[illegible]

事業名		ユニコムプラザさがみはら「まちづくりフェスタ」の展示
日時		2024年10月
場所		相模原市立市民・大学交流センター（ユニコムプラザさがみはら）
内容		「まちづくりフェスタ」とは、大学と地域の交流拠点ユニコムプラザさがみはらで実施されている地域活動や、大学の生涯学習講座・実用化研究成果、学生の地域連携活動等を発表し、相互に学び合うことを目的とするイベントである。今回は、CECについて、そして学生スタッフについて、市民協働プロジェクトについてのポスターを作成し、展示した。
成果		地域で行われたイベントにおいてポスター展示を実施し、地域の方々に活動を紹介することができた。普段の広報活動は、学内で学生を対象に行うことが多いが、今回のように地域で展示を行うことで、地域とのつながりを築くことができた。また、「まちづくりフェスタ」では、同じ相模原市内の他大学や地域団体の活動についても知ることができ、新たな発見があるとともに、良い刺激にもなった。
協力団体		相模原市立市民・大学交流センター（ユニコムプラザさがみはら）

事業名	第22回相模原祭への出展
日時	2024年10月12日(土)～13日(日)
場所	青山学院大学 相模原キャンパス
参加人数	25人
内容	相模原市3地域でのシビックエンゲージメントセンター主催の市民協働プロジェクト（相武台団地活性化プロジェクト、相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクト、藤野プロジェクト）の参加学生と共に、「CEC市民協働プロジェクト活動展示」として行った。 どのプロジェクトも活動展示を行った上に、相武台団地活性化プロジェクトでは、活動先である認知症対応型デイサービス内で行われる糸玉づくりのワークショップを実施した。相模原市中央区魅力発掘・創造・発信プロジェクトでは、中央区に関するクイズゲームを実施し、中央区の魅力を発信した。藤野プロジェクトでは、藤野で特産とされているゆずをメインとした商品の販売を行った。
成果	多くの来場者と直接交流する中で、プロジェクトの意義や成果について説明する機会となると同時に、自分たちの取り組みが地域社会にどのような影響を与えているのかを実感することができた。 また、準備期間は夏休み明けから約1か月強で、三つのプロジェクトが合同で取り組んだ。普段はなかなか交流することのない他のプロジェクトのメンバーとも関わることができ、プロジェクトの枠を超えた横のつながりが生まれた。お互いの活動について共有する中で、自分たちの活動への理解が深まり、新たな視点をすることもできた。
  	

Ⅲ 資料

シビックエンゲージメントセンター利用状況

センター利用状況

参加者とリピーター数

(単位：人)

延べ人数	507
参加人数	394
リピーター	76

参加カテゴリー

(単位：人)

セミナー・講座	274
ボランティア活動	198
シンポジウム	24
災害・復興ボランティア補助	9
教職員参加補助	2
	507

参加形態

(単位：人)

対面	496
オンライン	11
	389

参加者の属性（所属学部）と活動分野

(単位：人)

	活動分野	国際協力 ・交流	災害 ・復興支援	ジェンダー マイノリティ	子ども支援	教育	環境 整備	清掃	福祉	地域	その他	総計
学部生	属性	25	24	0	40	46	4	0	23	82	124	368
	文学部	3	1		8	5	1		1	8	13	40
	教育人間科学部	3	1		7	7				2	7	27
	経済学部		1		4	1				8	13	27
	法学部	5	2		4	6				4	13	34
	経営学部	1	1		4		2			3	8	19
	国際政治経済学部	9	4		4	6	1			3	9	36
	総合文化政策学部	3	4		2	3				3	9	24
	理工学部		1		2	8			1	2	7	21
	社会情報学部		1			2				4	3	10
	地球社会共生学部		5			2				13	6	26
	コミュニティ人間科学部	1	3		5	6			21	32	30	98
	不明										6	6
大学院生		1	0	0	0	2	3	0	0	2	12	20
	総合文化政策学研究科											0
	国際政治経済学研究科	1				1						2
	経営学研究科											0
	会計プロフェッション研究科										10	10
	国際マネジメント研究科	0				1	3			1		5
	教育人間科学研究科											0
	文学研究科											0
	理工学研究科									1		1
	経済学研究科											0
	不明										2	2
科目履修生							1					1
教員		7	3				1				11	22
職員		2	2						1			5
一般（学外）		6					9				65	80
不明		9										9
総計		50	29	0	40	48	18	0	24	84	214	507

ボランティア情報取扱数

1. 団体登録件数（新規登録団体）

青山	132 件 (15)
相模原	56 件 (6)

2. ボランティア等募集件数

青山	534 件
相模原	146 件

3. カテゴリー別ボランティア等募集件数

カテゴリー	青山	相模原
ボランティア募集	99 件	50 件
ニュースレター	357 件	50 件
講座・セミナー	22 件	17 件
イベント	31 件	26 件
助成金情報	5 件	1 件
インターン	4 件	2 件
シンポジウム	9 件	0 件
その他	7 件	0 件
合計	534 件	146 件

4. 領域別ボランティア等募集件数

領域	青山	相模原
災害救援・復興支援	9 件	3 件
社会福祉	39 件	44 件
環境保護	21 件	14 件
教育支援	34 件	15 件
スポーツ・文化・芸術	8 件	6 件
国際協力・交流	39 件	11 件
まちづくり	12 件	11 件
ジェンダー・マイノリティ	11 件	5 件
全般	361 件	37 件
合計	534 件	146 件

シビックエンゲージメントセンター利用状況

青山	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
来室者数	161	150	120	143	24	48	154	198	79	82	21	81	1,261
相談件数	18	10	12	5	0	2	5	0	2	2	0	1	57

相模原	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
来室者数	117	79	95	54	7	40	170	80	51	42	27	19	781
相談件数	8	4	3	2	0	0	1	6	1	0	5	2	32

前年度比

青山	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
来室者数	+ 63	+ 91	+ 16	+ 98	+ 12	+ 16	+ 10	+151	+ 42	+ 57	+ 4	+ 50	+ 610
相談件数	+ 11	+ 5	+ 3	+ 4	0	▲ 1	▲ 3	▲ 6	▲ 5	+ 0	+ 0	▲ 1	+ 7

相模原	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
来室者数	+ 50	▲ 7	+ 22	▲ 6	▲ 3	▲ 42	+ 37	▲ 8	▲ 37	▲ 3	▲ 1	▲ 3	▲ 1
相談件数	+ 2	+ 1	▲ 1	+ 0	+ 0	▲ 1	▲ 1	+ 4	▲ 1	+ 0	+ 5	+ 1	+ 9

青山 相談内容

日付	相談区分	相談内容
4月	海外ボランティアについて	夏休み期間中に海外ボランティアへ参加したいが、費用やどの団体なら信用できるかなど
	国内ボランティアについて	ボランティアサークルに興味がある。
	海外ボランティアについて	将来国際系の仕事に就きたいが、これからどのような仕事に関わっていったらよいか？
	その他	サービスマーケティングの授業について
	海外ボランティアについて	長期休暇中の海外ボランティア、短期での国内ボランティアや災害支援、募金・寄付
	組織運営・活動について	初等部・高等部の時に体験したフィリピンプログラムから派生して問題意識を大学で発信したい。
	国内ボランティアについて	1day、1回から参加できるもの、子どもとの交流、日本語、認知症サポーター講座などに関心あり
5月	国内ボランティアについて	ボランティアに興味あり、特に農業関係の情報が知りたい
	国内ボランティアについて	東京少年友の会学生ボランティアに興味がある
	国内ボランティアについて	ボランティアをやってみたい
	国内ボランティアについて	国内でのボランティア全般について相談したい。地域と関わる場所を探していて何かあれば紹介してほしい
	国内ボランティアについて	子どもに関わるボランティアについて
6月	その他	学生スタッフに興味がある
	国内ボランティアについて	今までなかなか一歩踏み出せないでいたが、人と関わる機会を積極的に作っていきたい
	国内ボランティアについて	障害ボランティアを探している
	その他	学生スタッフに応募したい。活動例や頻度について、また人見知りの性格をどうにかしたい。
	国内ボランティアについて	軽すぎず重すぎない内容のボランティアをどのように探したら良いか
7月	国内ボランティアについて	大学4年生でインターンもしているが、教育関係のボランティアで出来そうなものがあれば知りたい
	国内ボランティアについて	宮益坂で老女がゴミを食べていたのを目撃したので、渋谷の町でそのように困っている人を助けたい。
	国内ボランティアについて	ゼミの課題でボランティア活動を探している。(文化的なものにつながる内容)
	国内ボランティアについて	能登ボランティアで休暇中に参加できるものはないか
9月	海外ボランティアについて	ホノルルフェスティバルのボランティアについて様子や予算など知りたい
	国内ボランティアについて	学習支援に興味がある
	国内ボランティアについて	ウクライナから避難した人に向けたロシア語を使ったボランティアはないか
10月	国内ボランティアについて	春休みにできる宿泊ボランティアについて情報を教えてほしい。
	組織運営・活動について	ボラサボなどの相談。海外ルーツの子供への日本語 / 勉強を教える活動
	国内ボランティアについて	移民の子どもに無料で英語を使いつつ日本語教室を提供したいが、教える相手にアテがない。
12月	海外ボランティアについて	個人での海外ボランティア活動資金の面の援助・協力者の呼びかけについて。
	その他	ボランティアサークルで2月に予定しているイベントに大学名を使いたい

1月	国内ボランティアについて	自分（学生）が参加している活動・団体のボランティア募集依頼
3月	国内ボランティアについて	よこはま教育実践ボランティアに登録したい

相模原 相談内容

日付	相談区分	相談内容
4月	国内ボランティアについて	市民協働プロジェクトについて話を聞きたい。
	海外ボランティアについて	何かボランティア活動をしたい。外国人と関わる系、自然系、子ども系に興味がある。
	その他	ボラサポについての相談
	組織運営・活動について	食品ロス削減のためのキッチンカー運営をしたい。
5月	その他	CEC 学生スタッフに興味がある。説明会に参加できなかったので、詳しく教えて欲しい。
	国内ボランティアについて	後期に休学して半年間留学することになったので、8月までの学期間のボランティアを探している。
	国内ボランティアについて	新規ボランティアを立ち上げて、地域の特産品（相模原）を使った化粧品を作りたい。
6月	海外ボランティアについて	アフリカの学習ボランティアの内容について、また現地の教育はどのようなになっているのか。
	その他	自身が立ち上げている一般社団法人のボランティア募集のチラシなどを配架してもらいたい。
	国内ボランティアについて	授業を受けてボランティアに興味をもった。自然に関わる事や食糧配布などに興味がある。
7月	国内ボランティアについて	夏休みに集中してできるボランティアや、週1で長期的にできるボランティアを探している。
	ボランティア保険について	夏休みに参加するボランティア時のボランティア保険について
10月	国内ボランティアについて	青学国際子ども食堂について
11月	国内ボランティアについて	海外にルーツを持つ子どものボランティアに興味がある
	国内ボランティアについて	子供たちにダンスを無料で教えるボランティアの活動場所について相談。
	国内ボランティアについて	子供と関わるボランティアを経験したい。
12月	組織運営・活動について	AOGAKU ボランティアネットワークについて
2月	国内ボランティアについて	保護犬についての講演会やイベントをやりたい。

青山学院大学シビックエンゲージメントセンター規則

(2016 年 11 月 24 日理事会承認 (2022 年 2 月 24 日全部改正))

改正 2022 年 9 月 29 日

(趣旨)

第 1 条 この規則は、青山学院大学学則第 6 条第 2 項の規定に基づき、青山学院大学シビックエンゲージメントセンター（以下「センター」という。）の運営について必要な事項を定めるものとする。

(センターの目的)

第 2 条 センターの目的は、学校法人青山学院（以下「本法人」という。）が設置する学校（以下「設置学校」という。）に在籍する学生、生徒、児童及び園児並びに本法人の教職員が、主体的に多様なニーズに応える社会貢献活動を体験し、又は学問領域の枠にとらわれない知識を修得し、他者とともに未来の国際社会及び地域社会を創造する市民として、かつ、全てのひとと社会のために仕えるサーバント・リーダーとして成長するよう支援することとする。

(センターの事業)

第 3 条 センターは、前条に規定する目的を達成するため、ボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等の社会との連携を通じた教育研究及び設置学校間の連携に係る次の事業を行う。

- (1) ボランティア及び市民協働に関する活動の実施及び促進
- (2) ボランティア及び市民協働に関する活動の情報収集及び管理
- (3) ボランティア及び市民協働に関する活動への参画機会の提供並びに参画する学生及び団体の支援
- (4) サービス・ラーニング科目等の開発支援及び促進
- (5) 設置学校におけるボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等の支援及び促進
- (6) ボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等に関する学内外の専門家及び関連団体との連携の促進
- (7) ボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等に関する調査及び研究
- (8) センターの活動に関する成果の報告
- (9) 前各号に規定するもののほか、センターの目的達成に必要な事業

(センターの組織)

第 4 条 センターに、センター長 1 名を置く。

2 センターに、副センター長 1 名を置く。

3 センターに、助教若干名を置く。

4 センターに、助手若干名を置く。

5 センターの運営等に係る重要事項を審議するため、センターにシビックエンゲージメントセンター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

6 センターの運営等に必要な事項を検討するため、運営委員会の下にシビックエンゲージメントセンター実務委員会（以下「実務委員会」という。）を置く。

(センター長)

第 5 条 センター長は、センターの業務を統括し、センターを代表する。

2 センター長は、学長が青山学院大学（以下「本学」という。）の専任教員の中から候補者を推薦し、運営委員会及び学部長会の審議を経て、学長が委嘱する。

3 センター長の任期は、2 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 センター長は、再任されることができる。

(副センター長)

第 6 条 副センター長は、センター長を補佐し、センター長に事故あるときは、その職務を代理する。

2 前項に規定するもののほか、センター長は、必要があると認める場合は、副センター長にその職務の一部を臨時に代理させることができる。

3 副センター長は、センター長が本学の専任教員の中から候補者を推薦し、運営委員会及び学部長会の審議を経て、学長が委嘱する。

4 副センター長の任期は、2 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

5 副センター長は、再任されることができる。

(センター助教)

第 7 条 センターの助教（以下「センター助教」という。）は、学校法人青山学院助教に関する就業規則（以下「助教に関する就業規則」という。）の定めるところにより雇用された、センターに所属する本学の専任教員とする。

2 センター助教は、本学のいずれかの学部又は専門職大学院研究科（以下「学部等」という。）に分属する。

3 センター助教は、コーディネーターの呼称を使用することができる。

(センター助教の職務)

第 8 条 助教に関する就業規則第 4 条第 4 項の規定によるセンター助教の職務は、同条第 1 項に規定するものに加えて、次のとおりとする。

- (1) 第 3 条に規定するセンターの事業に係る業務
- (2) 前号に規定するもののほか、センター長が必要と認めた業務

(センター助教の資格)

第 9 条 センター助教は、助教に関する就業規則第 5 条第 1 項の規定により、青山学院大学専任教員の任用及び昇任に関する規則（以下「専任教員任用昇任規則」という。）第 2 条第 4 項各号のいずれかに該当する者でなければならない。

2 前項に規定するもののほか、助教に関する就業規則第 5 条第 2 項の規定によるセンター助教の資格は、ボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等の社会との連携を通じた教育研究に係る専門的知識を有する者で、センターの

事業を遂行するために必要な能力を有するものとする。

(センター助教の雇用手続)

第10条 センター助教の雇用は、次項から第5項までの規定による。

- 2 センター長は、センター助教の候補者の雇用が適当であると認めたときは、運営委員会の審議を経て、学長に、センター長による推薦状、当該候補者の経歴、業績等が明記された書類その他必要と認められる書類を添えて、その候補者の雇用を発議する。
- 3 学長は、前項の規定による発議を適当と判断したときは、学部長会にこれを付議する。この場合において、前項の候補者が雇用された場合の分属学部等について、併せて付議する。
- 4 前項の学部長会において、候補者を雇用することが可とされ、かつ、その分属学部等が決定した場合の当該候補者の雇用の決定は、専任教員任用昇任規則第3条第1項第3号から第6号までに規定する手続を経なければならない。この場合において、同項第3号中「学部長等」とあるのは「分属先の学部等（以下「分属学部等」という。）の長」と、「当該専任教授会」とあるのは「当該分属学部等の専任教授会」と、同項第4号中「専任教授会」とあるのは「分属学部等の専任教授会」と、同項第5号中「学部長等は、専任教授会」とあるのは「分属学部等の長は、当該分属学部等の専任教授会」とする。
- 5 専任教員任用昇任規則第3条第1項第4号の審査委員会については、同規則第4条の規定を準用する。この場合において、同条第1項中「専任教授会」とあるのは「分属学部等の専任教授会」と、同条第2項本文中「当該学部等」とあるのは「分属学部等」と、同項ただし書中「当該学部等」とあるのは「当該分属学部等」と、「他学部」とあるのは「分属学部等以外の学部」と、同条第4項中「各学部等」とあるのは「分属学部等」と読み替えるものとする。

(センター助教の雇用契約の契約期間等)

第11条 センター助教の雇用契約の契約期間、待遇、勤務等については、助教に関する就業規則の定めるところによる。

(センター助手)

第12条 センターの助手（以下「センター助手」という。）は、学校法人青山学院助手に関する就業規則（以下「助手に関する就業規則」という。）の定めるところにより雇用された、センターに所属する本学の専任教員とする。

- 2 センター助手は、コーディネーターの呼称を使用することができる。

(センター助手の職務)

第13条 助手に関する就業規則第4条第3項の規定による職務は、同条第1項に規定するものに加えて、次のとおりとする。

- (1) 第3条に規定するセンターの事業に係る業務
- (2) 前号に規定するもののほか、センター長が必要と認めた業務

(センター助手の資格)

第14条 センター助手は、助手に関する就業規則第5条第1項の規定により、専任教員任用昇任規則第2条第5項各号のいずれかに該当する者でなければならない。

- 2 前項に規定するもののほか、助手に関する就業規則第5条第2項の規定によるセンター助手の資格は、ボランティア及び市民協働に関する活動又はサービス・ラーニングに係る専門的知識を有する者とする。

(センター助手の雇用手続)

第15条 センター助手の雇用は、次項から第4項までの規定による。

- 2 センター長は、センター助手の候補者の雇用が適当であると認めたときは、運営委員会の審議を経て、学長に、センター長による推薦状、当該候補者の経歴、業績等が明記された書類その他必要と認められる書類を添えて、その候補者の雇用を発議する。
- 3 学長は、前項の規定による発議を適当と判断したときは、学部長会にこれを付議する。
- 4 候補者の雇用の決定は、前項の規定により学部長会の審議を経た後、常務委員会及び常務理事会で協議し、理事会の承認を得なければならない。

(センター助手の雇用契約の契約期間等)

第16条 センター助手の雇用契約の契約期間、待遇、勤務等については、助手に関する就業規則の定めるところによる。

(協力者)

第17条 センター長は、センターの事業の実施に必要であると認める場合は、当該事業に協力する者（以下「協力者」という。）を置くことができる。

- 2 協力者は、センターの事業の実施に必要な専門的知識又は経験を有する本学外の者で、当該事業の実施に係る助言又は協力を行う。
- 3 協力者は、センター長が候補者を推薦し、運営委員会の審議を経て、学長が委嘱する。
- 4 協力者の任期は、原則として1年以内とする。ただし、再任されることができる。
- 5 協力者は、当該協力者であることを示すものとして、アドバイザーの呼称を使用することができる。
- 6 第2項の助言又は協力は、無償とする。ただし、センター長が、必要であると認める場合は、学校法人青山学院謝礼等の支給基準に関する内規（以下「支給基準に関する内規」という。）の定めにより、報酬又は謝礼を支給することができる。

(運営委員会の構成)

第18条 運営委員会は、次の委員をもって構成する。

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 大学宗教部長
- (4) 本学の専任教員の中からセンター長が指名する者 次のとおりとする。
 - イ 青山キャンパスを就学キャンパスとする学部又は研究科から 1名以上
 - ロ 相模原キャンパスを就学キャンパスとする学部から 1名以上
- (5) 庶務部長
- (6) 学生生活部長
- (7) 相模原事務部長
- (8) 学務部長

- 2 前項第4号に規定する委員の任期は、2年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。
- 3 前項の委員は、再任されることができる。

(運営委員会の招集、開催、表決数等)

第 19 条 運営委員会は、センター長が招集し、議長となる。

2 運営委員会は、必要に応じて開催する。

3 運営委員会の開催は、委員の 3 分の 2 以上の出席を必要とする。この場合において、運営委員会で審議する事項につき、書面をもってあらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。

4 運営委員会の議決は、出席した委員の過半数の賛成を必要とする。

5 議長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。

(運営委員会の審議事項)

第 20 条 運営委員会は、次の事項を審議する。

(1) センターの運営等に係る基本方針に関する事項

(2) センターの予算及び決算に関する事項

(3) センター長、副センター長、センター助教及びセンター助手の人事に関する事項

(4) 前 3 号に規定するもののほか、センターの運営に必要な事項

(実務委員会の構成及び開催)

第 21 条 実務委員会は、次の委員をもって構成する。

(1) センター長

(2) 副センター長

(3) センター助教

(4) センター助手

(5) 本学の専任教員の中からセンター長が指名する者 次のとおりとする。

イ 青山キャンパスを就学キャンパスとする学部又は研究科から 1 名以上

ロ 相模原キャンパスを就学キャンパスとする学部から 1 名以上

(6) 庶務部社会連携課長

(7) 学生生活部学生生活課長

(8) 相模原事務部学生生活課長

(9) 学務部教務課長

(10) 相模原事務部学務課長

2 前項第 5 号に規定する委員の任期は、2 年とする。ただし、前任者が任期の途中で退任した場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

3 前項の委員は、再任されることができる。

4 実務委員会は、センター長が必要に応じて招集し、議長となる。

5 センター長は、必要があると認める場合は、委員以外の者を列席させ、意見を聴くことができる。

(実務委員会の業務)

第 22 条 実務委員会は、次の事項について協議し、その執行に当たる。

(1) センターの事業遂行に係る計画の策定及びその実施に関する事項

(2) センターが行うボランティア及び市民協働に関する活動、サービス・ラーニング等に係る企画、立案及び実施に関する事項

(3) 外部の組織との連携に関する事項

(4) センターの予算案の作成及び予算の執行に関する事項

(5) 学生スタッフに関する事項

(6) 前各号に規定するもののほか、センターの運営等に必要な事項

2 センター長は、必要があると認める場合は、前項の規定による協議、執行等の結果を、運営委員会に報告する。

(学生スタッフ)

第 23 条 センター長は、必要があると認める場合は、センターに学生スタッフを置くことができる。

2 学生スタッフは、センター長の指示により、センターの活動に係る補佐業務に当たる。

3 前項の補佐業務は、無償とする。ただし、センター長が、必要があると認める場合は、支給基準に関する内規の定めにより、報酬又は謝礼を支給することができる。

4 学生スタッフは、本学の学部又は大学院研究科に在籍する学生で、センターの活動への参加を希望する者の中から、センター長が任命する。

(所管)

第 24 条 この規則は、庶務部社会連携課が所管する。

(改廃手続)

第 25 条 この規則の改廃は、運営委員会及び学部長会の意見を聴いた後、常務委員会で協議し、理事会の承認を得て、学長がこれを行う。

附 則

1 この規則は、2022 年 4 月 1 日から施行する。

2 2022 年 3 月 31 日において青山学院大学ボランティアセンターの助手として在職した者で、この規則の施行日においてセンター助手として在職するものは、この規則で定めるところによりセンター助手として雇用され、又はその契約期間を更新されたものとみなす。

附 則 (2022 年 9 月 29 日)

この規則は、2022 年 9 月 30 日から施行する。

2024 年度 シビックエンゲージメントセンター 委員一覧

2025 年 3 月 31 日現在

運営委員会

センター長（議長）	宮副 謙司（国際マネジメント研究科 教授）
副センター長	黒岩 裕（コミュニティ人間科学部 教授）
大学宗教部長	大宮 謙（社会情報学部 教授）
センター長指名（青山）	外岡 尚美（文学部 教授）
	中邨 良樹（経営学部 教授）
センター長指名（相模原）	河見 誠（コミュニティ人間科学部 教授）
社会連携部部長	濱本 嘉郎
学生生活部長	藤井 隆司
相模原事務部長	田口 知博
学務部長	乃美 浩一

実務委員会

センター長（委員長）	宮副 謙司（国際マネジメント研究科 教授）
副センター長	黒岩 裕（コミュニティ人間科学部 教授）
センター助教	秋元 みどり
	三神 憲一
センター助手	中里 晋三
	広瀬 かおり
	水谷 耕平
センター長指名（青山）	シュー土戸 ポール（文学部 教授）
	山本 珠美（教育人間科学部 教授）
センター長指名（相模原）	菅野 幸恵（コミュニティ人間科学部 教授）
	堀江 正伸（地球社会共生学部 教授）
	渡邊 昌宏（理工学部 教授）
社会連携部部長	濱本 嘉郎
学生生活部学生生活課長	太田 浩史
相模原事務部学生生活課長	信國 達哉
学務部教務課長	中居 哲也
相模原事務部学務課長	海野 大輔

学生スタッフ 青山キャンパス

新井 真由子（文学部 4 年）
 荒川 十嬉（総合文化政策学部 2 年）
 金谷 航太郎（経済学部 3 年）
 キム ジェユン（国際政治経済学部 3 年）
 五島 綺音（文学部 2 年）
 五明田 七海（法学部 3 年）
 鈴木 遥香（経済学部 3 年）
 須藤 希（文学部 2 年）
 田村 知暉（総合文化政策学部 2 年）
 土肥 恵（法学部 2 年）
 富岡 日暖（経営学部 2 年）

中尾 真優（文学部 4 年）
萩原 稜久（経済学部 2 年）
林 一葉（法学部 3 年）
星 亮成（経済学部 3 年）
穂積 葉奈（教育人間科学部 2 年）
松本 奈々花（経営学部 2 年）
宮下 采音（経済学部 1 年）
棕本 実優（経済学部 1 年）
森 結香菜（法学部 3 年）
矢口 英幸（大学院国際マネジメント研究科 2 年）
山崎 柑奈（文学部 1 年）

相模原キャンパス

鵜島 伊吹（コミュニティ人間科学部 2 年）
黒木 雫（コミュニティ人間科学部 1 年）
小鮒 巧実（コミュニティ人間科学部 3 年）
戸田 うい（コミュニティ人間科学部 2 年）
マカトリー シオン（地球社会共生学部 1 年）

シビックエンゲージメントセンター（CEC）ロゴ

シビックエンゲージメントセンター（以下、CEC）はこれまでのボランティア活動支援に加え、市民協働活動そしてサービス・ラーニングの3つを活動の基軸とし、より自発的な社会参加を促し、社会課題解決に取り組み、社会貢献活動に取り組めるよう支援することが求められている。

一方、名称からどのような役割を担うセンターかイメージしづらく、ボランティアや社会貢献活動に関心がある学生と直接的接点を持てなくなることが懸念されていた。そこで、CECを学生たちに認知されやすく、親しみを持ってもらえるようなイメージロゴマークを学内で募集した。

応募作品の選考については、大学関係者以外にも本学のキャンパスが所在する東京都渋谷区役所と神奈川県相模原市役所の職員の方にも審査員として協力いただき、最終的には4件の応募作品の中から石原穂乃香さん（当時、総合文化政策学部総合文化政策学科4年）デザイン「Spring」が採用された。



作品コンセプト：

「C」と「E」と「C」を組み合わせた誰でも走り書きができそうなシンプルなシンボルになっていて、その気軽さとバネのようなシルエットでフレンドリー感を出し、柔軟性を表現している。

シビックエンゲージメント研究 第3号

2025年11月20日発行

編集 シビックエンゲージメント研究編集委員会

発行 青山学院大学シビックエンゲージメントセンター

（青山キャンパス）

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25

（相模原キャンパス）

〒252-5258 神奈川県相模原市中央区淵野辺5-10-1

印刷 株式会社創志

